文部科学省指定事業

新時代に対応した高等学校改革推進事業

（創造的教育方法実践プログラム）

研究開発実践報告書

北海道伊達開来高等学校

令和６年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）
研究開発実践報告書の発行にあたって

北海道伊達開来高等学校は伊達市内にあった２校の道立高校を統合し、令和３年４月に開校した学校です。この統合により本校は市内唯一の高等学校となったことから、これまで以上に地域からの期待も大きく、地域の高校として、「地域と連携・協働しながら、グローバルな視点をもって地域の課題に対して主体的に考え、取り組むなど、伊達市及び西胆振の未来を創造する生徒」の育成を目指して、伊達市と連携・協働しながら「探究的学習プログラム」、「グローカルプログラム」、「キャリアプログラム」を柱とする教育活動を展開しています。

このため、本校の教育課程では全ての教育活動において探究的な学習活動を取り入れています。中でも３年次生全員が履修する学校設定科目「だて学」については、１・２年次の総合的な探究の時間と各教科における探究活動を基盤に、「地域貢献」をテーマに伊達市を中心とした西胆振の課題を解決することを目的として９つの分野でゼミ形式による探究活動を行っています。そして、これらの探究活動をより効果的に実践するため、オンラインを活用して高等教育機関等の講義の受講や、生徒が設定した課題に応じて継続的に専門家と研究協議を行い指導・助言が受けられるような連携体制の構築、ＳＴＥＡＭ教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するカリキュラム開発を目指し、令和４年７月、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）」の研究指定を受け、実質２年半にわたって研究事業を進めて参りました。

本事業の成果詳細については本編の報告書に記載してありますが、本校としては大きく２つの成果があったと考えています。１つは、専門家や高等教育機関等との連携により、生徒がより高度で専門的な知識を得ることができるようになったことで、私たちが想像していた以上に質の高い探究活動を行うことができたこと。それにより、本校が探究活動を通じて特に身に付けさせたい能力としている「思考力」「創造力」「分析力」が向上したことが、調査の数値や生徒や教職員の実感として得ることができ、最終的に生徒の自信に繋がったということです。もう１つは、この事業において本校の探究活動の課題と今後の改善の方向性が明確になったことです。開校４年目の本校はまだまだ手探りの状態で探究活動を行っていることもあり、今後の本校の改善すべき教育活動の方向性が明らかになったことは、本校にとって何よりの成果だったと感じております。本事業は本年度で終了となりますが、これらの成果と課題を踏まえ、さらに充実した教育活動を進めていきたいと考えています。

最後となりますが、本事業の推進にあたり、多くのご助言を賜りました運営指導委員会およびコンソーシアムの皆様、連携協力いただきました室蘭工業大学を始めとする各大学、学校法人吉田学園、胆振振興局並びに伊達市の皆様、そして運営を支えていただきました北海道教育委員会事業推進チームの皆様に心より感謝を申し上げるとともに、今後とも本校の教育活動にご助言・ご支援を賜りますことをお願い申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和７年３月

北海道伊達開来高等学校
校長　藤　村　　学

目　次

巻頭言

１　構想概要図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

２　ロジックモデル　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

３　成果概要図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

４　目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

５　令和６年度の事業の実績　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９

６　３年間の研究成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　51

７　事業の実施体制や管理方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65

８　運営指導委員会の体制及び取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66

９　コンソーシアムの体制及び取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69

10　コーディネーターの配置及び活動内容　・・・・・・・・・・・・・・・　71

11　令和６年度成果普及のための取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・　72

12　本事業のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　73

【北海道伊達開来高等学校】遠隔等を活用した大学等の協力による持続可能な社会を担う人材育成

育成を目指す資質・能力

主体的に学び、意欲的に新たな学びに取り組む力

多様性を尊重し、互いのよさを認めて協働する力

地域社会に貢献し、持続可能な未来を創造する力

ジェネリックスキル：自己肯定力　表現力　思考力　傾聴力　調整力　創造力　分析力

探究的学習プログラム
地域課題の解決に資する力の育成

学校設定科目 数学分野
学校設定科目 情報分野
学校設定科目 商業分野
学校設定科目 家庭分野
学校設定科目 芸術分野
学校設定科目 体育分野

だて学

総探② 異文化理解 地域課題の解決

総探① 探究基礎 地域理解

総探③ 地域理解の深化 地域貢献

遠隔講義等による新たな学びの創造！

北海道伊達開来高等学校

Internet

遠隔講義、オンライン学習ツール

連携協力校

高等教育機関、研究機関など

教員全体の指導力向上 働き方改革

グローカルプログラム
グローバルな視点で地域を支える力の育成

キャリアプログラム
一人一人の自己実現と地域貢献

『だてコンソーシアム』
本校と地域、関係機関等が相互に連携協働

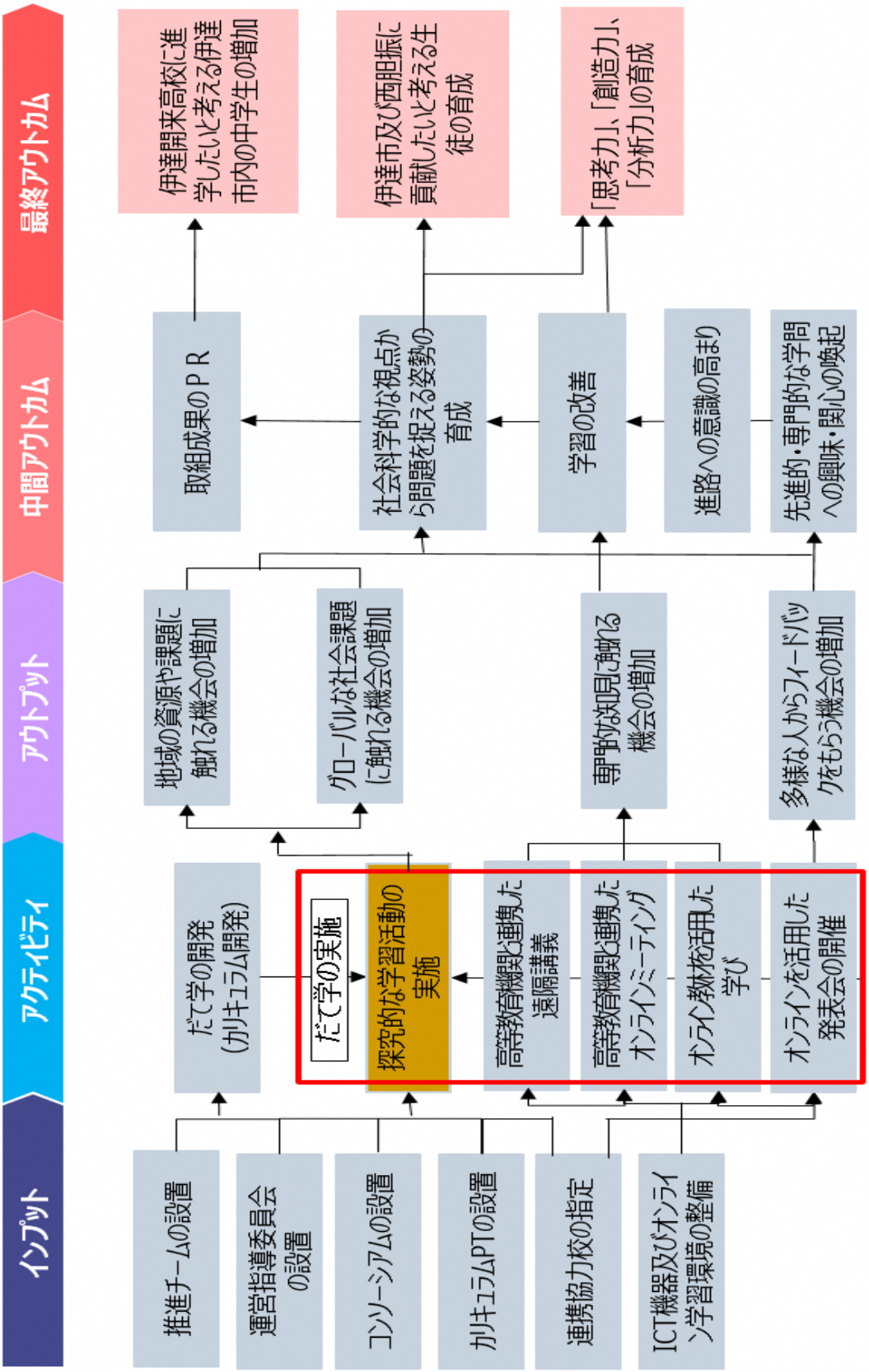
本事業における実践を支援

大学・専門学校
教育研究機関
本校
企業
教育委員会 小中学校
伊達市

令和3年度に連携した関係機関
※出前講座、インターンシップは除く

北海道大学
室蘭工業大学
北海道教育大学
吉田学園
日本工学院
北斗文化学園
ベネッセ
リクルート
代々木ゼミナール
伊達市
農協・漁協
食育センター

2　ロジックモデル


インプット
アクティビティ
アウトプット
中間アウトカム
最終アウトカム
推進チームの設置
運営指導委員会の設置
コンソーシアムの設置
カリキュラムPTの設置
連携協力校の指定
ICT機器及びオンライン学習環境の整備
だて学の開発（カリキュラム開発）
だて学の実施
探究的な学習活動の実施
高等教育機関と連携した遠隔講義
高等教育機関と連携したオンラインミーティング
オンライン教材を活用した学び
オンラインを活用した発表会の開催
地域の資源や課題に触れる機会の増加
グローバルな社会課題に触れる機会の増加
専門的な知見に触れる機会の増加
多様な人からフィードバックをもらう機会の増加
取組成果のＰＲ
社会科学的な視点から問題を捉える姿勢の育成
学習の改善
進路への意識の高まり
先進的・専門的な学問への興味・関心の喚起
伊達開来高校に進学したいと考える伊達市内の中学生の増加
伊達市及び西胆振に貢献したいと考える生徒の育成
「思考力」、「創造力」、「分析力」の育成

【北海道伊達開来高等学校】遠隔等を活用した大学等の協力による持続可能な社会を担う人材育成

新しい教育方法を活用した教科等横断的な学びのカリキュラムの概要

学校設定科目「だて学」

1　目的
地域を題材に探究的な学びを深めること

2　概要
・各教科の特色を生かし地元について知るとともに、将来、自らが地域にどのように貢献できるのか探究する。
・高等教育機関や事業所などと連携することで、発展的な課題の解決に取り組む。

【「だて学」に関連する各種分野】

国語科分野	芸術（美術）分野
地歴・公民分野	外国語科分野
理工分野	家庭科分野
生命医療分野	商業情報科分野
保健体育科分野	

【高等機関等と連携した学びのイメージ】

関係機関との連携・協働体制の構築方法

主にコーディネーター（以下「ＣＮ」という。）が次の役割を担い、関係機関等と連携・協力体制を構築。
①「だて学」のコンセプトを関係機関に説明
②連携・協力する関係機関等との連絡調整
③校内における連絡調整
④運営指導委員会やコンソーシアム会議の運営　等

【校内各課との連絡調整イメージ】

【関係機関等との連絡調整イメージ】

令和６年度の目標

①オンラインを活用して高等教育機関から講義を受けるなど、より専門的な教育を受けられる機会を設ける。
②生徒が設定した課題に応じて、継続的に専門家と研究協議を行い、指導・助言が受けられるよう、様々な高等教育機関等との連携体制を構築する。
③ＳＴＥＡＭ教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するカリキュラムを開発する。

取組状況

①総合的な探究の時間及び「だて学」において、高等教育機関による遠隔講義を実施
②生徒が設定した課題に応じて、各分野の専門家と研究協議を行い指導・助言を受けるなど、ネットワーク体制を強化
③主体的に探究活動に取り組む生徒の増加により、道教委主催の探究活動成果発表会「探究チャレンジ」における上位大会への進出

成果と課題

○　探究活動を通じて特に身に付けさせたい能力としている「思考力」、「分析力」、「創造力」が向上し、最終的に生徒の自己肯定力が伸長した。
○　高等教育機関との連携により専門的な知識を得ることができ、質の高い探究活動を行うことができた。
○　地域企業と連携した授業を実施することができた。
●　探究活動を更に充実させる必要がある。
●　開発したカリキュラムを通じて身に付けた資質・能力の評価方法を確立する必要がある。

北海道伊達開来高等学校

別紙様式５

４　目的

(1) 本事業に申請する高等学校を取り巻く状況の分析、本事業に取り組む必要性

○　北海道伊達開来高等学校は、伊達市内にあった２校の道立高校を統合して、令和３年４月に開校した学校である。本校は、伊達市内唯一の高等学校となったことから、地域の高校として、「地域と連携・協働しながら、グローバルな視点をもって地域の課題に対して主体的に考え、取り組むなど、伊達市及び西胆振の未来を創造する生徒」の育成を目指して、伊達市と連携・協働しながら「探究的学習プログラム」「グローカル･プログラム」「キャリア・プログラム」を柱とする教育活動を展開している。

○　現在は、統合前の２校を合わせた生徒数よりも生徒数が増え、多様な学力層の生徒が在籍している。本校では、こうした状況を想定して、１ランク上の進学を目指す「進学探究」と自分の学びたいことを探究する「自己探究」の２種類のクラスを設置している。いわゆる「進学校」と「進路多様校」が１校に混在している状況である。そのため、生徒の探究課題が多岐にわたることから、この課題の解決に向けて、より多くの外部機関と連携し、生徒の探究課題に応じた専門的な指導を得る必要がある。

○　本校は、全ての教育活動において、探究的な学習活動を取り入れることとしており、授業時間を 55 分として、活動時間を確保している。特に、３年次生全員が履修する学校設定科目「だて学」については、地域貢献をテーマとして、伊達市を中心とした西胆振の課題を解決するため、国語、社会、数学、理科、体育、家庭、英語、芸術、情報、商業の 10 の分野から研究することとしている(※１)。また、生徒の多様な進路希望に応じるため、体育や芸術、家庭、情報、商業、数学において多くの学校設定科目を設置している。

○　開校時より全ての科目において授業で探究的な学習活動を実践したが、その多くは、「課題を調べる、調べた課題に応じてテーマを設定する、テーマに基づき課題解決策を検討する、課題解決策をまとめ発表する」といった流れであり、生徒による差異が少ないため、学習活動にも大きな差がない状況である。

○　上記の学習活動を本校では、「インサイド・アウト（課題解決型探究活動）」と定義することとし、令和４年度は「アウトサイド・イン（未来ソウゾウ“想像・創造”型探究活動）」（「ゴールをイメージし、そのゴールに向けて何ができるかを探究する活動」と定義）を実践した。

○　「アウトサイド・イン」を実践した場合、ゴールイメージが同じだったとしても、その解決策は多岐にわたる。また、探究活動を進める中で、より高度な新たな課題が発生する。その課題の解決に向け、より専門的な指導を行うため、高等教育機関との連携を推進している。

○「だて学」では地域の課題解決をテーマに探究活動を行うこととし、各教科等で学んだ知識・技能や思考力・判断力・表現力等を活用する科目として令和５年度に開講した。今後、「だて学」の実践を重ねることにより、「だて学」を中心としたカリキュラム開発の成果が得られると考える。

○　同時に、本校の学校設定科目の多くは、３年次に履修可能であることから、各教科において探究活動を位置付けた指導計画に基づき、さらに実践を重ねている。探究活動をより効果的に実践するためには、他教科で身に付けた資質・能力を活用する必要があるため、教科等横断的な視点でのカリキュラムを開発するなど、各教科の連携を図る必要がある。

○　こうしたことから、遠隔講義（※２）及びオンライン教材等の活用や、オンラインミーティングによる研究協議を実施するなど、高等教育機関との連携体制を構築するとともに、総合的な探究の時間や学校設定科目を中心に教科等横断的な視点でのカリキュラム開発が必要である。

※１　令和６年度は国語・社会・理工・生命医療・体育・芸術・外国語・家庭・商業情報の９分野である。

※２　ここでいう遠隔講義とは、講師と生徒の同時双方向型のやりとりを含むものである。

(2) 本事業を実施する目的・目標（本事業を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

【目的】

○　本校は、地域住民や子ども達の期待に応えられる教育環境の確保と特色ある教育活動の展開を目的として、本道ではあまり例のない地元自治体主導のもとに統合した新設校であるため、他の自治体からも本校の取組は注視されている。道教委としても本校の取組を支援することとしており、本事業を通じて、本校が育成を目指す資質・能力を、教科等横断的な視点で育成できるよう、特色を活かした教育課程を編成し、その成果の普及を図ることで、本道はもとより、全国の高校教育改革のモデルとしての役割を果たす。

【目標】

○　オンラインを活用して高等教育機関から講義を受けるなど、より専門的な教育を受けられる機会を設ける。

○　生徒が設定した課題に応じて、継続的に専門家と研究協議を行い指導助言が受けられるよう、様々な高等教育機関等との連携体制を構築する。

○　ＳＴＥＡＭ教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するカリキュラムを開発する。

【育成を目指す資質・能力】

○　本校は、「情熱にあふれ　たくましく　しなやかに生きる人を育む」を学校教育目標として、その内容を具現化した３点（「主体的に学び、意欲的に新たな学びに取り組む力」、「多様性を尊重し、互いのよさを認めて協働する力」、「地域社会に貢献し、持続可能な未来を創造する力」）で育成を目指す資質・能力を示している。

○　３つの資質・能力を育成するため、全ての教育活動を通じて、７つのジェネリックスキル（「自己肯定力」「表現力」「思考力」「傾聴力」「調整力」「創造力」「分析力」）を身に付けさせることとしている。７つのジェネリックスキルとは、育成を目指す資質・能力を育成する基礎となるスキルである。

○　本事業においては、高等教育機関等と連携し、自己のキャリア形成及び地域課題の解決に特に重要と考える「思考力」「創造力」「分析力」を育成する。

ジェネリックスキルに関するルーブリック

育成を目指す資質・能力			主体的に学び、意欲的に新たな学びに取り組む力		多様性を尊重し、互いのよさを認めて協働する力		地域社会に貢献し、持続可能な未来を創造する力		
ジェネリックスキル			自己肯定力	表現力	思考力	傾聴力	調整力	創造力	分析力
			自己を理解して自信を持ち、他者を尊重することができる	考えをまとめ、他者にわかりやすく伝えることができる	課題の重点を認識し、解決方法を導き出すことができる	要点を把握し、共感して他者の話を聞くことができる	異なる考えをまとめ、物事を判断し行動することができる	既成概念にとらわれず、新しい物事を考えることができる	課題を明確にし、本質がわかるように整理することができる
評価尺度	S	求めているレベルを越えて達成している	自分や他者の長所を的確に把握し、周囲と共感し協働して、責任ある言動をとることができる	伝え方を工夫して的確かつ論理的に説明することができる	課題を解決する方法を見出すことができる	話の要点を整理し、その内容を把握して、共感しながら相手の話を聞くことができる	価値観や意見の異なる人とも深い信頼関係を築き、立ち位置を考え協働することができる	経験のない状況や困難でも、既知の知識や技能を活用し、課題を解決をすることができる	仮説を実施し、得た結果を整理し、新たな課題解決に向けた方策を考えることができる
	A	求めているレベルを十分に達成している	客観的に自分や他者の長所を理解し、物事に取り組むことができる	相手に対して伝えたい主旨を適切に説明することができる	課題の重点や根拠を認識することができる	相手の話の内容から、自分の考えとの同意点や相違点を理解して話を聞くことができる	価値観や意見の違いを理解し、その中で自分の考えを適切に伝え行動することができる	既知の知識や技能を活用し、新たな課題解決の方法を提案することができる	把握された状況や整理された課題から、課題解決のための仮説を提案することができる
	B	求めているレベルを達成している	自分や他者の努力してきたことや改善を図ってきたことを確認することができる	相手に伝えたい内容を言語化して、わかりやすく伝えることができる	課題を整理することができる	相手の話の主旨を理解して聞くことができる	価値観や意見が自分とは異なる人の発言を冷静に受け止め、相手を尊重した対応ができる	既知の知識や技能を理解し、工夫や改善の方策を考えることができる	置かれた状況や環境から課題を整理することができる
	C	求めているレベルをおおむね達成している	自分が取り組んできたことが、人の役に立っていることを感じることができる	相手に伝えたい内容を伝えることができる	疑問や課題を感じることができる	相手の話を静かに聞くことができる	自分と他の人との価値観や意見の違いを理解することができる	既知の知識や技能を用いて、状況を把握することができる	置かれた状況や環境を客観的に把握することができる

５　令和６年度（指定事業３年目）の事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和６年４月１日～令和７年３月３１日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
探究推進委員会	●	●	●	●		●	●	●		●		●
総合的な探究の時間に関する校内研修	●											
外部講師が来校した講座	●	●	●	●		●	●		●			
連携機関との打ち合わせ	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
外部連携先での学習活動			●	●								●
オンライン双方向の学習活動		●	●	●		●		●				
オンライン会議の講演			●									
メール等による外部連携	●	●	●	●		●	●					
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会								●			●	
コンソーシアム会議		●				●		●			●	
小中高「だて学」担当者連携会議				●								●
伊達市教育実践交流研修会				●								
室蘭工大、振興局、コーディネーターの連携会議		●										
コーディネーター												
コーディネーター（伊藤氏）	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	
成果発表・成果普及												
「だて学」全体発表会								●				
社会との共創推進プロジェクト				●		●		●		●	●	
探究チャレンジ胆振・日高									●			
成果検証												
アンケート調査		●						●				

(2) 新しい教育手法を活用したカリキュラム開発

・「地域貢献」をテーマに探究的な学習活動を展開することから、地域との協働や地域の活性化等について、遠隔講義を活用するなどして、高等教育機関からより専門的な講義を受けられるようにした。

・また、基盤となる知識を遠隔講義等で学ぶことに加え、オンラインミーティングを活用した同時双方向の研究協議を実施して、生徒の主体的な学びや協働的な学びを促すとともに、専門家から適切な助言をいただいた。

・小学校、中学校との連携を強化して、「だて学」担当者間で探究活動を進める際により効果的な地域の人材と教育資源の活用方法について意見交換をし、また小学校、中学校を高校生による「地域貢献」の場とした活動を拡充した。

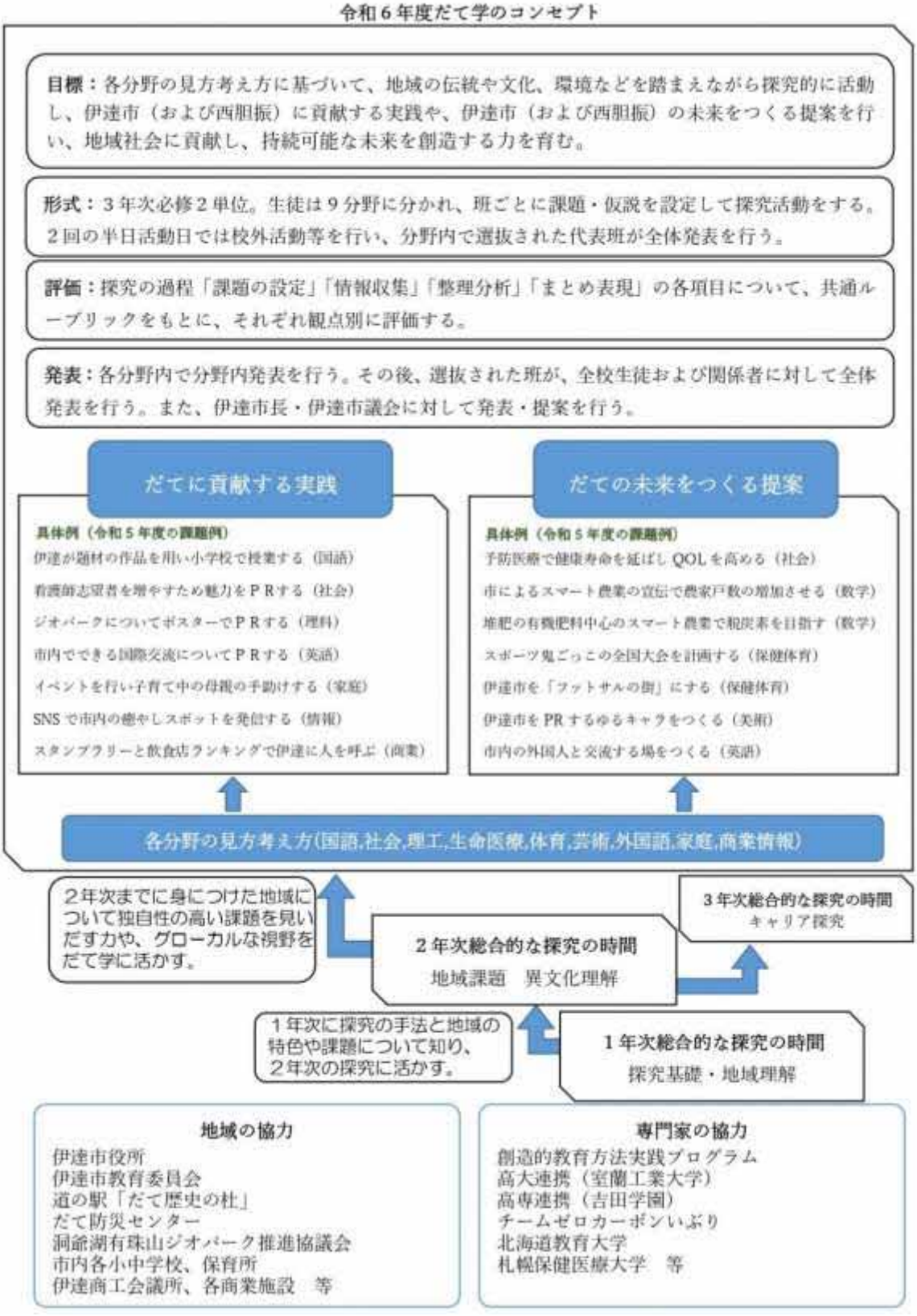
(3) 事業の具体

ア　だて学の全体像

令和６年度のだて学は、以下の計画に基づき実施した。

北海道伊達開来高等学校

令和６年度だて学のコンセプト



だて学の評価にあたっては、以下のルーブリックを用いて評定を算出した。

だて学共通ルーブリック

探究学習では「課題の設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」という過程を経るのでそれぞれについて評価する。
ア「知識・技能」，イ「思考・判断・表現」，ウ「主体的に学習に取り組む態度」
※年間を通じて(1)~(4)の4項目を評価する。評価の機会は，中間発表・教科発表のタイミングを目安とする。「何回目で何を評価するか」は各教科の都合によるので固定しない。2回目，3回目の評価で前の評価を上書きしてよいものとする。

ア「知識・技能」，イ「思考・判断・表現」，ウ「主体的に学習に取り組む態度」

		A基準	B基準	C	知識技能	思判表	主体的に
(1) 課題設定	ア	深く調べて得た知識に基づいた課題となっている	新たに調べた知識に基づいた課題となっている	十分な調査をせずに課題を設定している			
	イ	学習の目的とスケジュールに適しており，かつ独自性があり価値の高い課題を設定できている	学習の目的とスケジュールに適した課題を設定できている	学習目的やスケジュールに適さない，すぐ解決する浅い課題や，具体性に欠け取り組み困難な課題にとどまっている			
	ウ	より良い課題となるよう，繰り返しグループ内で情報的な議論を行い設定した課題となっている	グループ内で議論を行い，幅広い意見をもとに設定した課題となっている	グループ内で議論ができていない			
(2) 情報収集	ア	インターネットのみならず，努力・工夫して，外部機関、アンケートなど必要な手段を幅広く効果的に用いて情報収集をしている	インターネットのみならず，外部機関、アンケートなど必要な手段を幅広く用いて情報収集をしている	情報源がインターネットのみなど，少数にとどまっている			
	イ	課題の解決に適して主張できるだけの，質の高い情報を収集している	課題の解決に適した情報を収集している	収集した情報から課題の解決が導くことができない			
	ウ	協働的に情報収集を行い，課題の解決を強く主張できるだけの情報量を満たしている	協働的に情報収集を行い，整理・分析に値する情報量を満たしている	整理・分析に値する情報量を満たしていない			
(3) 整理分析	ア	収集した情報を取捨選択し，課題の解決を主張するのに効果的な順で整理できている	収集した情報を取捨選択し整理できている	収集した情報を並べただけにとどまっている			
	イ	課題を解決するための独自性のある価値の高い分析となっているか	課題を解決するための分析となっている	課題と分析の内容にずれがある			
	ウ	課題に十分に向き合い，時間をかけて深く議論をし，考察・分析している	課題に十分に向き合い，質で議論をして考察・分析している	考察・分析が不十分である			
(4) まとめ表現	ア	図表などを上手に使い見やすく魅力的なスライド資料になっている	図表などを上手に使い見やすいスライド資料になっている	図表などを使用せず字の羅列となっており，スライド資料が見にくい			
	イ	自分たちの意見がよく伝わるよう，論理の流れがわかりやすいようにまとめ，課題の解決が示せている	自分たちの意見を論理的にまとめ，課題の解決が示せている	自分たちの意見がはっきりしない，または課題の解決が示せていない			
	ウ	自分事として地域に貢献するような成果を出している	自分事として地域に貢献する意欲が見える	自分事として地域に貢献する意欲が見えない			

観点ごとの評価

観点ごとのABCの付け方	・Cがなく，Aが4つ中に3つ以上あればA ・Cが4つ中に2つ以上あればC ・Cがなく，Aが2つ以上あればB ・Cがなく，Aが1つあれば4 ・Cが2つあれば2 ・CCCは1
評定	左記以外はB(年間途中の評価は左記と同等扱いを基準とする)

イ　３年次だて学「国語分野」

教科・科目	だて学（国語）	実施日	５月 17 日（金）
単　元　名	事前調査		
本時の目標	海外の日本語学習者の実情を知ろう		
連携機関等	バルトルディ高校（アルザス_フランス）　教員および生徒 北海道帯広柏葉高等学校　国際交流部　教員および生徒　※主催、参加 北海道釧路湖陵高等学校　教員および生徒　※参加		
連携の目的	地域紹介動画の制作にあたり、実際に海外の日本語学習者と話し、日本のどのようなところに興味・関心を抱いているかを調査する。		

本時・連携の内容

１　形　式　オンラインミーティング

２　内　容

・日本語による自己紹介

・日本の地方都市に旅行に行くとしたら、どのようなところに興味を持つか

・フランスの地方都市に旅行に行くとしたら、どのようなところに興味を持つか

・日本語によるフリートーク

評　価 （成果・課題）	海外の日本語学習者と実際に話すことで、彼らが日本のどのようなところに興味を持っているか、また、コミュニケーションをとる際に気をつけなければならない話し方や語彙の選択について理解することができた。

教科・科目	だて学（国語）	実施日	６月４日（火）
単　元　名	事前調査		
本時の目標	北海道を題材とする文芸を調査し、得られた情報を整理する		
連携機関等	北海道帯広柏葉高等学校（北海道教育大学大学院）　戸川貴之　教諭		
連携の目的	北海道を題材とする文芸（アイヌの口承文芸）と教育との関連を研究する専門家に、研究の手法や、その価値についての実際を尋ねる。		

本時・連携の内容

１　形　式　書面による質疑応答（6/10 返信）

２　内　容

・戸川氏は「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動」（2020-2021）で科研費助成事業（奨励研究）の採択を受けるなど、アイヌの口承文芸と高等学校国語教育を関連させた言語活動の専門家である。本校生徒が探究の過程で、アイヌの口承文芸と国語科の授業との関連について関心を寄せたことをきっかけに、戸川氏にオンラインドキュメントを共有する形で標記の目的に係る質問を送付し、書面にて回答を得ることができた。

評　価 （成果・課題）	専門家への質疑応答から、北海道を題材とする文芸と教育との関連に係る内容を確認することができた。

教科・科目	だて学（国語）	実施日	６月４日（火）
単　元　名	情報収集（半日活動日）		
本時の目標	伊達市の観光への取組について情報を収集し整理する		
連携機関等	伊達市経済環境部商工観光課、市内の飲食店（洋麺茶屋牧家、回転寿司割烹伊達和さび、だて歴史文化ミュージアム、だて歴史の杜※別日）および観光施設		
連携の目的	高校生が独自の観光に係るアイデアを創出するにあたり、伊達市の観光への取組を調査する。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面による取材

２　内　容

・グループは「伊達市の観光」について、リーチする対象を「日本に興味があり、海外から伊達市を訪れる観光客」と「未来の伊達市への観光客」に設定した。このことに係り、それぞれの背景を踏まえて、動画によって伊達市の魅力を広げるという手段を設定し、すでにある伊達市の観光への取組等をその内容に盛り込むため、市内の飲食店および観光施設、伊達市経済環境部商工観光課への取材を半日活動日に実施した。商工観光課の担当者からは資料をいただき、伊達市の観光への取組について説明を受けることができた。

評　価（成果・課題）	説明を受けたほか、本グループの探究活動について、伊達市による後援（SNS上での取組の紹介）の可能性について協議することができた。

教科・科目	だて学（国語）	実施日	7月23日（火）
単　元　名	情報収集（半日活動日）		
本時の目標	グループ①伊達市の観光への取組について情報を収集し整理する グループ②伊達市の歴史や文化を知り、国語の学習につなげる		
連携機関等	市内の観光施設（①北黄金貝塚、②だて歴史文化ミュージアム）および飲食店（①ブーランジェリーibox）		
連携の目的	①伊達市の観光への取組を調査する。 ②北海道を題材とする文芸を調査し、得られた情報を整理する		

本時・連携の内容

1　形　式　対面による取材

2　内　容

・半日活動日において対面による取材を実施した。グループ①は市内の観光施設や飲食店を取材し、伊達市の観光への取組について調査を進めた。グループ②はだて歴史文化ミュージアムに取材し、道内でも特に伊達市に係る国語教材を調査した。

評　価 （成果・課題）	半日活動日の午後からは、それぞれに調査した内容を持ち帰り、整理することで今後の活動につなげることができた。

教科・科目	だて学（国語）	実施日	10 月 22 日（火）
単　元　名	本調査		
本時の目標	調べた内容をもとに、北海道を題材とする文芸を教材とした単元の指導計画を作成する。		
連携機関等	北海道帯広柏葉高等学校（北海道教育大学大学院）　戸川貴之　教諭		
連携の目的	「言語文化」について生徒の考えた単元の指導計画について、専門家から助言をいただく。		

本時・連携の内容

1　形　式　10/25 にオンラインドキュメントへのコメント形式で助言を受けた

2　内　容

・以前からご協力をいただいていた戸川氏に、生徒が、北海道を題材とする文芸（バチェラー八重子『若きウタリに』）を教材として作成した「言語文化」の単元指導計画を見ていただき、計画全般や、言語活動についての助言をいただいた。

評　価 （成果・課題）	Google ドキュメントのコメント機能を活用した非同期的な連携ではあるが、ドキュメント上に直接記録が残るため、生徒が内容を見直す上で非常に有意義な活動となった。

ウ　３年次だて学「社会分野」

教科・科目	だて学（社会）	実施日	６月４日（火）
単　元　名	だて学		
本時の目標	警察組織の女性比率について知る		
連携機関等	明治大学		
連携の目的	警察組織の女性比率が低いことについて、警察組織の歴史と体質を理解することで、今後提案する女性警察官増員に向けての対策への一助とする		
本時・連携の内容			
１　形　式　Zoomによるオンライン講演 ２　内　容 明治大学客員研究員　吉田如子様に、事前に送った質問に関するテーマについて講演していただいた。（13:30～14:35） ・性犯罪やＤＶについて、女性が被害者になることが多いのに女性警察官が少ないということについて ・女性警察官増加のための政策や各国の比較について			
評　価 （成果・課題）	女性が被害にあった性犯罪や DV の際の被害聴取や、その結果に関する論文や調査データについてのお話を聞くことで勉強になった。		

エ　３年次だて学「理工分野」

教科・科目	だて学（理工）	実施日	４月 16 日（火）
単　元　名	課題設定		
本時の目標	課題設定に必要な基礎知識を得る。また、課題設定の考え方を知る。		
連携機関等	胆振振興局、室蘭工業大学		
連携の目的	講演によって、課題設定に必要な身に付けさせ、課題設定のヒントにする。また、「探究とは何か」「探究課題の設定とは何か」ということを、大学教授の立場から説明していただき、活動に見通しを持たせる。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面の講演

２　内　容

(5 限)胆振総合振興局　ゼロカーボン担当主査　倉野健人氏

「脱炭素概論」というタイトルで、ゼロカーボン・カーボンニュートラル・脱炭素について講演していただいた。

(6 限)室蘭工業大学　山中真也　教授

「脱炭素概論　その 2　～みんなで描く伊達市のみらい～～常識ってなに？～」というタイトルで課題設定についての考え方を講演していただいた。

評　価 （成果・課題）	生徒はゼロカーボンに関する基礎知識を得て、課題設定に必要な事項を考えることができた。 特に、再生可能エネルギー利用に関わる廃棄物についての視点を得ることができ、課題の幅が広がった。

教科・科目	だて学（理工）	実施日	４月 23 日（火）
単　元　名	課題設定		
本時の目標	課題設定に必要な基礎知識を得る。また、課題設定の考え方を知る。		
連携機関等	伊達信用金庫、（胆振振興局、室蘭工業大学）		
連携の目的	講演によって、課題設定に必要な身に付けさせ、課題設定のヒントにする。また、ゼロカーボンと経済活動が関連していることを意識付け、そこに金融業の果たす役割について理解させる。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面の講演

２　内　容

(5 限)伊達信用金庫　理事長　舘崎雄二氏

「脱炭素と経済」というタイトルで、ゼロカーボンと地域経済の関わり、金融機関の役割について講演していただいた。

評　価 （成果・課題）	生徒はゼロカーボンに関連して、経済的な観点が重要であるということがわかり、課題設定に必要な視点を身に付けることができた。

教科・科目	だて学（理工）	実施日	６月４日（火）
単　元　名	情報収集		
本時の目標	情報を収集する		
連携機関等	伊達市教育委員会		
連携の目的	小中学校の太陽光パネル設置について知る		

本時・連携の内容

１形　式　対面による説明

２内　容

小中学校の太陽光パネルの設置状況について、伊達市教育委員会企画総務係渡邉様に来校していただき、説明していただいた。

評　価	市内の太陽光パネルの設置状況を知ることで、生徒たちは本校に設置した際のシミュレーションをする材料を得ることができた。

教科・科目	だて学（理工）	実施日	６月４日（火）
単　元　名	情報収集		
本時の目標	情報収集をする		
連携機関等	胆振総合振興局		
連携の目的	情報収集の方針について助言をいただく		
本時・連携の内容			
１　形　式　対面での助言・指導 ２　内　容 胆振総合振興局倉野様に来校いただき、温泉発電に関する情報収集の進め方について助言をいただいた。 			
評　価	適切な方針を定め、情報収集活動を進めることができた。		

教科・科目	だて学（理工）	実施日	６月 11 日（火）
単　元　名	情報収集・整理分析		
本時の目標	情報収集と整理分析の方針を確認する。		
連携機関等	胆振総合振興局・室蘭工業大学		
連携の目的	生徒に対し助言をしていただく		
本時・連携の内容			
１　形　式　Zoom オンラインミーティングおよび対面での助言・指導 ２　内　容 14:00～15:20 の時間で、室蘭工業大学山中真也教授にオンラインを活用して助言をいただいた。（山中教授は学会出席のためフィンランド、ヘルシンキに滞在中なので現地ホテルと Zoom でつないだ。）また、５、６限を通して胆振総合振興局倉野様に来校いただき、助言をいただいた。 14:00～14:10　山中教授の出席中の学会について紹介 14:10～15:20　山中教授に対し１班ずつ進捗報告をし、助言をいただいた。（10 分×６班程度）			
評　価 （成果・課題）	生徒は情報収集の進め方について方針を確認したり修正したりすることができた。		

教科・科目	だて学（理工）	実施日	７月９日（火）
単　元　名	情報収集		
本時の目標	情報収集		
連携機関等	苫小牧バイオマス発電株式会社・胆振総合振興局		
連携の目的	生徒からオンラインでインタビューする		
本時・連携の内容			
１　形　式　Zoom オンラインミーティング ２　内　容 14:00～14:40 苫小牧バイオマス発電株式会社(代表取締役社長　岡田 真 様)と Zoom で接続し、木材調達と発電事業について生徒からインタビューを行った。 依頼は胆振総合振興局倉野様に取り次いでいただいた。			
評　価 （成果・課題）	生徒は必要な情報を集めることができた。		

オ　３年次だて学「家庭分野」

<table>
<tr><td>教科・科目</td><td>だて学（家庭）</td><td>実施日</td><td>４月 23 日（火）</td></tr>
<tr><td>単　元　名</td><td colspan="3">課題設定</td></tr>
<tr><td>本時の目標</td><td colspan="3">伊達市の障がい者福祉のあゆみについて学ぶ</td></tr>
<tr><td>連携機関等</td><td colspan="3">社会福祉法人　伊達コスモス 21</td></tr>
<tr><td>連携の目的</td><td colspan="3">伊達市の障がい者福祉のあゆみについて講演していただくこと</td></tr>
<tr><td colspan="4">本時・連携の内容</td></tr>
<tr><td colspan="4">１　形　式　対面の講演
２　内　容　講演会（５時間目）場所：被服実習室
講師：社会福祉法人　伊達コスモス 21　理事長　大垣　勲男　氏
内容：伊達市の障がい者福祉のあゆみについて学ぶ
 </td></tr>
<tr><td>評　価
（成果・課題）</td><td colspan="3">伊達市の障がい者福祉のあゆみについて理解し、課題決定の一助となった。</td></tr>
</table>

教科・科目	だて学（家庭）	実施日	半日活動日他
単　元　名	職場体験、実習、講話		
本時の目標	各班ごとに立案した仮説を検証する		
連携機関等	伊達市内学校、福祉施設他		
連携の目的	就業体験学習を通して望ましい勤労観・職業観を育むとともに、だての福祉を学び、課題解決に役立てる。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での講話・説明・実技講習・実習

２　内　容

グループ別連携先

・リラクゼーションサロン umi⇒ハンドマッサージの理論と実技を学ぶ（5/28,6/4）

・市内高齢者へハンドマッサージを実践する（7/9,7/23）

・伊達市障がい者総合相談支援センター「あい」⇒講話(5/28)

社会福祉法人　伊達コスモス２１　ふみだす⇒実習(7/16)

ＮＰＯ法人　伊達市手をつなぐ育成会⇒講話(7/23)

評　価 （成果・課題）	交流をとおして望ましい勤労観・職業観を育むとともに、課題解決に向け仮説の検証ができた。

教科・科目	だて学（家庭）	実施日	半日活動日他
単　元　名	職場体験、実習、講話		
本時の目標	各班ごとに立案した仮説を検証する		
連携機関等	伊達市内学校、福祉施設他		
連携の目的	就業体験学習を通して望ましい勤労観・職業観を育むとともに、だての福祉を学び、課題解決に役立てる。		

本時・連携の内容

１　形　式　訪問による実習・企画実践

２　内　容

・日本赤十字社　伊達赤十字病院⇒実習(6/4) グループホームねねむ⇒実習(6/18, 6/25)
社会医療法人滋恵会　聖ヶ丘病院⇒実習(7/23)

・伊達市立ひまわり保育所⇒実習(6/4, 7/23) 伊達市立くるみ保育所⇒実習(7/23, 10/15)

５班：伊達小学校⇒6/4, 7/23

６班：ＪＡとうや湖　⇒伊達市職場見学（6/4）

７班：だて歴史の杜カルチャーセンター⇒スマホ教室（7/16, 9/3）

評　価 （成果・課題）	交流をとおして望ましい勤労観・職業観を育むとともに、課題解決に向け仮説の検証ができた。

教科・科目	だて学（家庭）	実施日	６月 11 日（火）
単　元　名	課題設定		
本時の目標	社会福祉施設における衛生管理について学ぶ		
連携機関等	室蘭地方食品衛生協会、胆振総合振興局室蘭保健所		
連携の目的	伊達市内各事業所における実習に向け、衛生管理について学び、学習に役立てる。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面の講演

２　内　容

社会福祉施設における衛生管理についての講演（５，６時間目）

場所：家庭保育室、調理実習室

講師：室蘭地方食品衛生協会事務局長　田中　實　氏

　　胆振総合振興局室蘭保健所生活衛生課長　通山　志保　氏

評　価 （成果・課題）	衛生管理の大切さについて理解し、今後の実習に向けて意識が高まった。

教科・科目	だて学（家庭）	実施日	７月９日（火）
単　元　名	情報収集		
本時の目標	伊達市の福祉のあゆみについて学ぶ		
連携機関等	伊達市健康福祉部		
連携の目的	伊達市の福祉のあゆみについて講演していただくこと		

本時・連携の内容

１　形　式　対面の講演

２　内　容

伊達市の福祉のあゆみについての講演（５時間目）

場所：家庭保育室

講師：伊達市健康福祉部社会福祉課障がい者福祉係　近江　克規　氏

伊達市高齢福祉課高齢者福祉係　坂本　子竜　氏

伊達市健康福祉部子育て支援課児童家庭係　岡山　卓史　氏

評　価 （成果・課題）	伊達市の福祉のあゆみについて理解し、課題決定の一助となった。

カ　２年次「総合的な探究の時間」

教科・科目	総合的な探究の時間（２年次生）	実施日	９月 12 日(木)
単　元　名	地域課題　整理分析		
本時の目標	献血事業への関心を高めるための方策を知る		
連携機関等	北海道赤十字血液センター　苫小牧出張所		
連携の目的	血液の確保状況、献血協力の実態等について理解する		

本時・連携の内容

１　形　式　Zoom オンラインミーティングによるインタビュー

２　内　容

北海道赤十字血液センター苫小牧出張所とオンラインで接続し、血液の確保状況や地域の献血協力の実態などについて生徒からインタビューを実施した。

評　価 （成果・課題）	生徒が知りたい情報を収集することができた。新しい情報を得ることができ、次の活動へ繋がる機会となった。

教科・科目	総合的な探究の時間（２年次生）	実施日	10 月 31 日（木）
単　元　名	異文化理解		
本時の目標	台湾への興味関心を引き出すとともに、台湾の文化に対する理解を深める。		
連携機関等	一般財団法人 北海道国際交流センター　陳玫秀　（チン メイ シュウ）　様		
連携の目的	異文化理解のスタートである導入講演を通して、訪問国の歴史や文化を学び、今後の活動に繋げていく。		

本時・連携の内容

１　形　式　Zoom オンラインミーティングによる講演

２　内　容

体育館に集合し、北海道国際交流センターの陳玫秀氏より台湾の歴史や文化の概要について講演いただいた。

また、質疑応答を通じて台湾の文化に関する理解を深めることができた。

評　価 （成果・課題）	見学先の情報や食・生活文化などに関する情報を収集することができ、台湾に関するイメージを持つことができた。

キ　１年次「総合的な探究の時間」

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	５月 30 日（木）
単　元　名	地域理解		
本時の目標	南極観測隊の経験を通して、世界から地域を眺める視点を持つことの大切さを知るとともに、地域への愛着を持たせる。		
連携機関等	伊達市農業委員会 事務局 伊達元成 様 （第 20 代亘理伊達家当主）		
連携の目的	伊達市で活躍されている方の経験を通じて、生徒自身の将来を意識させることで探究活動の導入とし、また伊達市に対する新たな視点を得させる。		

本時・連携の内容

１　形　式　対面による講演

２　内　容

体育館で「南極観測隊×伊達開来高校 未来への挑戦」というタイトルで講演していただいた。伊達市で生まれ育ち、南極観測に従事し、また伊達市に戻って市のために働いている氏の経験を通じたメッセージをいただいた。

評　価 （成果・課題）	氏の体験を通じて、生徒自身の未来を思い描くきっかけとなったとともに、世界的な視点から伊達市を見つめ直すことができるようになった。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	６月 19 日（水）
単　元　名	地域理解		
本時の目標	伊達市の農業と、ワイン用ブドウの生産について知る		
連携機関等	Ryra Vineyard &Wine 株式会社、伊達市経済環境部農務課		
連携の目的	伊達市の農業の現在と、未来に向けたプロジェクトについて知り、探究活動の一助とする。		

本時・連携の内容

１　形　式　Zoom オンラインミーティングによる講演および対面での講演

２　内　容

体育館に集合し、はじめに伊達市経済環境部農務課の渡邊和大様から、伊達市の農業の現状と農務課の施策について対面で講演いただいた。その後、フランス在住の Ryra Vineyard &Wine 株式会社代表取締役桜井楽生様から、オンラインで講演いただいた。

伊達市をスパークリングワインの世界的産地にしたいという「夢」とその実現に向けたプロジェクトについて説明していただいた。

評　価 （成果・課題）	生徒は伊達市の基幹産業である農業について知るとともに、大きなプロジェクトで「課題の解決」をしてゆくという考えかたと心構えを学ぶことができた。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	10 月 10 日（木）
単　元　名	地域理解　分野別交流会（歴史と社会）		
本時の目標	外部講師の講話を通じて、各分野に対する理解を深め、今年度のみならず次年度以降の探究活動に活用する。		
連携機関等	北海道伊達市商工観光課商工観光課係　渡辺　一郎　氏		
連携の目的	「本時の目標」と同様		
本時・連携の内容			
１　形　式　対面での講演 ２　内　容 ・伊達市における観光について、伊達市が実施している観光施策や方針などについて、伊達市の現状を踏まえながらご講義いただいた。 （伊達市観光施策に関わる説明、外国人観光客の宿泊者推移、伊達市では外国人移住者への取組は行っているのか） ・生徒からの質問 伊達の飲食店の外国人の利用者数など			
評　価 （成果・課題）	生徒は伊達市の観光施策に関する理解を深め、質問などを通して自分の班の課題について深く考える機会になったと考えられる。		

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	10 月 10 日（木）
単　元　名	地域理解　分野別交流会（生活と文化①）		
本時の目標	伊達近郊の廃校利用の道筋を模索する		
連携機関等	伊達市役所		
連携の目的	市役所の方々に、自分たちの班の内容を伝えてアドバイスをいただく		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での助言・指導

２　内　容

伊達市企画財政部の伊藤氏、堀氏、浦添氏、渡辺氏に来校いただき、生徒の課題、仮説と情報収集した内容や進め方に助言、指導を受けた。

評　価 （成果・課題）	廃校利用において考慮すべき観点について知識を得ることができ、各班の疑問を解決し、今後の活動の方針を立てることができた。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	10 月 10 日（木）
単　元　名	地域理解　分野別交流会（生活と文化②）		
本時の目標	外部講師の講話を通じて、各分野に対する理解を深め、今年度のみならず次年度以降の探究活動に役立てる。		
連携機関等	株式会社道南スコーレ(伊達市総合体育館)　副施設長 小林朋寛氏		
連携の目的	「本時の目標」と同様		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での講演

２　内　容

伊達市総合体育館を運営する道南スコーレの小林様に、次の内容を説明していただいた。

・伊達市総合体育館「あかつき」の名前の決定方法と由来
・体育館の施設費
・体育館の利用者数
・利用者の年齢比　　など

質疑応答

・維持費はいくらぐらいか
・バリアフリーを取り入れている施設の箇所と内容
・高校生の利用で一番多い所　　など

評　価 （成果・課題）	生徒は伊達市総合体育館に関する理解を深め、自分の班の課題について深く考える機会となったと考えられる。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	10 月 17 日（木）
単　元　名	地域理解　分野別交流会（食と健康）		
本時の目標	情報収集		
連携機関等	伊達市　健康福祉部健康推進課		
連携の目的	伊達市の食と健康について講演していただく		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での講演

２　内　容

伊達市　健康福祉部健康推進課　保健師　中澤明子氏、管理栄養士　高瀬桃子氏に来校いただき、伊達市の健康課題や健康推進課の施策などについて講演していただいた。

評　価 （成果・課題）	生徒は伊達市の健康課題や行政の施策を知り、課題解決につなげることができた。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	10 月 10 日（木）
単　元　名	地域理解　分野別交流会（自然と技術）		
本時の目標	外部講師の講話を通じて、各分野に対する理解を深め、今年度のみならず次年度以降の探究活動に役立てる。		
連携機関等	北海道胆振総合振興局保健環境部環境生活課　　倉野　健人　氏		
連携の目的	「本時の目標」と同様		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での講演

２　内　容

「ゼロカーボン概論」の題目で、地球温暖化の影響・温室効果ガスの排出量を減らす方法などについて、北海道の現状を踏まえながらご講義いただいた。

評　価 （成果・課題）	生徒は地球温暖化の現状や対策について、知識を増やすことができた。今後の探究活動の参考にできると考えられる。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	12 月５日（木）
単　元　名	地域理解　活動の整理（歴史と社会）		
本時の目標	伊達市の活性化につながる取組の先行事例について学ぶ		
連携機関等	国立大学法人　室蘭工業大学　システム理化学科　山中真也　教授		
連携の目的	分野のなかで伊達市の活性化につながる取組を企画するにあたり、同様の取組で成果を挙げている先行事例の当事者に話を聞きながら、自身の課題やその解決のための手法に気づくこと。		

本時・連携の内容

１　形　式　オンラインミーティング（Zoom）による取材

２　内　容

・山中教授が令和６年度に実施した「アントレキャンプ」の取組について、その経緯や成果について紹介いただいた。当日は「アントレキャンプ」に参加した学生も同席いただき、参加するなかで得た経験や学んだことについて話を聞くことができた。

評　価 （成果・課題）	探究活動を進めるうえでのポイントや、まとめと整理の場面で意識することなどを学ぶことができた。

教科・科目	総合的な探究の時間（１年次生）	実施日	12 月５日（木）
単　元　名	地域理解　活動の整理（自然と技術）		
本時の目標	外部講師の講話を通じて、各分野に対する理解を深め、今年度のみならず次年度以降の探究活動に役立てる。		
連携機関等	水車・アヤメ川自然公園を育てる市民の会　共同代表　横山暢様		
連携の目的	「本時の目標」と同様		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での講演

２　内　容

水車・アヤメ川自然公園を育てる市民の会の活動（市民活動事例）について講演を受けた。活動の様子の写真をまとめたパワーポイントを用いて、どのようなことを考えながら市民活動を続けているかお話しいただいた。また、高校生が探究活動を行う際のアドバイスをいただいた。

＜学んでほしいこと・考えてほしいこと＞

① 発想の転換。やらなくてはならないことから権利へ。
　→子どもを含めて市民には「意見表明権」がある。

② 地域住民や専門家や協力者へのアプローチ
　→高校生からのアプローチを大人は待っている。

③ 課題（テーマ・フィールド・対象）の設定が大事

④ 構造化・文章か・目的の明確化

＜高校生へのアドバイス＞

積極的に市民団体のイベントに参加する。学ぶときに失敗を恐れない。探究活動を楽しむ。

評　価 （成果・課題）	生徒は身近にある「水車・アヤメ川自然公園」が市民団体により積極的に維持されていることを改めて知った。また、探究活動のヒントを得て、自分たちの活動に活かす具体的な方法を学ぶことができた。

ク　３年次理科「化学」

教科・科目	理科・化学	実施日	５月 29 日（水）
単　元　名	無機物質		
本時の目標	無機物質とは何かについて理解を深めること。		
連携機関等	公立千歳科学技術大学		
連携の目的	大学の視点から化学に触れ、化学の興味関心を深めること。		
本時・連携の内容			
１　形　式　オンライン授業 ２　内　容 オンラインで公立千歳科学技術大学の坂井先生と接続し、授業の冒頭 10 分程度「無機化学とはどのような学問か」について、最新の科学技術を例に、大学の視点からお話いただいた。その後、質疑応答を行い２名の生徒から質問が出た。坂井先生とのコーディネーター役として、同大学の近藤先生に調整していただいた。			
評　価 （成果・課題）	事後アンケートでは、出席した 75%の生徒が無機物質の授業に興味がわいたと回答した。また授業を通して、日本の化学産業の強みについて理解できたという意見も複数出たこともあり、今後単元の内容を学ぶ上でのやる気につながったのではないかと考えられる。 課題としては、お話いただく内容についてテーマは事前に共有していたが、詳しい内容を高校と大学側で、もう少し擦り合わすことができていたら良かった。		

教科・科目	理科・化学	実施日	６月 26 日（水）
単　元　名	無機物質		
本時の目標	前時に学習した錯イオンについて、理解を深める。		
連携機関等	公立千歳科学技術大学		
連携の目的	錯イオンについて大学の研究の視点から話を聞き、日常生活とのつながりを捉え、興味・関心を深めること。		
本時・連携の内容			
１　形　式　オンライン授業 ２　内　容 オンラインで公立千歳科学技術大学の坂井先生と接続し、金属錯体についての詳しい解説をしていただいた。教科書では、錯体の定義について簡単に触れられているのみであるが、坂井先生が研究されている「光る錯体」について解説をいただき、日常生活とのつながりを捉える機会を得た。坂井先生には、授業の冒頭で解説をいただき、その後、質疑応答とアンケートをした。コーディネーターとして、同大学の近藤先生に調整していただいた。			
評　価 （成果・課題）	前回の連携時に、生徒から「もう少し難しい話も聞いてみたい。」との意見があり、大学側に話のレベルを上げてもらうように依頼した。しかし、レベルが上がり過ぎて、集中が切れた生徒が前回よりも多い印象だった。既習事項の電子配置について、本質的な軌道の話を説明してもらったが、例え話がわかりやすく、生徒からも好評だった。Zoom の画面共有における資料の文字が小さく、生徒の手元でも資料が見える工夫が必要だと感じた。		

教科・科目	理科・化学	実施日	７月 19 日（金）
単　元　名	有機化合物		
本時の目標	有機化合物とは何かについて話を聞き、今後の学びに見通しを持つ。		
連携機関等	公立千歳科学技術大学		
連携の目的	有機化合物について、大学の研究の視点から話を聞き、日常生活とのつながりを捉え、興味・関心を深めること。		

本時・連携の内容

１　形　式　オンライン授業

２　内　容

オンラインで公立千歳科学技術大学の堀野先生と接続し、有機化合物について解説をいただいた。有機化合物の分野を本格的に学ぶのは夏休み明けであるが、今後の学びについて見通しを持ち、前向きに学びに向かってほしいとのねらいから、夏休み前に設定した。連携は授業の後半に設定し、質疑応答も含めて 25 分程度でお願いした。主に、有機化合物とはどのような物質か、有機化合物を理解するとどのような利点があるかについて、薬という切り口から解説していただいた。

堀野先生とのコーディネーター役として、同大学の近藤先生に調整していただいた。

評　価 （成果・課題）	一部の生徒はメモを取りながら、意欲的に連携授業に参加していた。しかし、堀野先生の話の切り口は面白かったが、専門的な用語がさりげなく多数登場し、多くの生徒が理解するには難しい内容であった。 また、授業の後半の時間帯であったこと、教室の３０度近い気温、連携についての物珍しさが薄れてきたなどの要因から、これまでの連携の中で一番生徒に響きにくかったと考えられる。教科書の内容にもう少し近づけた中身で、今後改めて有機化合物についての連携を行いたいと考えている。

ケ　３年次理科「地学」

教科・科目	理科・地学	実施日	11 月 14 日（木） 11 月 15 日（金）
単　元　名	古生物学		
本時の目標	古生物学者の仕事内容と葉の化石から過去の地球の気温を推定する		
連携機関等	北海道博物館		
連携の目的	化石調査・同定における専門家より詳しい古生物学の知識を得る		
本時・連携の内容			
１　形　式　オンライン授業 ２　内　容 オンラインで北海道立博物館学芸員 成田敦史氏から、古生物学とは何か（考古学との違い）、化石の形成過程・メカニズム、鋸歯の有無の割合から算出される気温について実習を通じて学んだ。 			
評　価 （成果・課題）	専門的な観点から、実物化石を用いた授業を行っていただくことで生徒は理解を深めることができた。		

コ　３年次理科「理科応用」「物理研究」

教科・科目	理科・理科応用 理科・物理研究	実施日	９月 27 日（金） ９月 30 日（月）
単　元　名	放射線		
本時の目標	レントゲン写真を撮影する		
連携機関等	北海道科学大学		
連携の目的	放射線に関する特別授業の実施		

本時・連携の内容

１　形　式　対面での授業・実験

２　内　容

北海道科学大学診療放射線学科　宗像 聖良 氏に来校いただき、レントゲン検査の原理、放射線の性質と安全管理などに関する特別授業をしていただいた。

実際に生徒１人ひとりがレントゲン写真を撮影する実験を行った。

評　価 （成果・課題）	生徒は放射線とレントゲン写真について理解を深めることができた。

サ　３年次「だて学」の探究課題一覧

分野	探究課題
国語分野	・伊達市は良さを伝えきれていないのではないかー動画の反応数からわかる伊達市の強みについて ・昭和時代の北海道を舞台とした書籍の作品論～本から学ぶ時代背景～
社会分野	・街に学生を増やすには ・伊達市に今の高校生が卒業後に残ってくれるようにしたい ・女性警察官の採用枠が少ないことの問題点 ・伊達市のボランティアをより活性化しよう ・伊達市の子育て支援制度について ・学生や大人が集中して勉強や仕事ができる場所をつくるためにはどうしたらよいか。
理工分野	・人力発電で町のお年寄りの運動不足解消と電気料金の削減 ・牛のゲップによるメタンガス排出の抑制 ・温泉発電を利用して、持続可能なホテルを伊達市に実現するには ・エアコンの冷房機能を利用して効率的に節電につなげる ・太陽光パネルを活用して二酸化炭素排出量を減らす ・未利用材の木質バイオマス利用
生命医療分野	・伊達市の献血者数を増やす ・高齢者の運動能力の低下 ・生活習慣病 ・ペットの殺処分問題 ・さまざまな有珠山の顔 ・高齢者の運動能力の低下 ・放射線
体育分野	・伊達市で主催することで伊達市の活性化とともにドッチボールとスポーツ鬼ごっこをすることでスポーツの楽しさを知ってもらう ・世代を通してコミュニケーションを取る ・伊達市でスポーツフェスを開催しよう ・伊達市民の健康寿命を伸ばす
芸術分野	・伊達市の特産品であるアロニアをもっと有名にするにはどうしたらいいか ・伊達の特産物である藍を若者にも知ってもらったり楽しんでもらうためには？ ・伊達温泉に伊達市以外の人を集めるには ・伊達市の特産品であるだて牛乳を盛り上げるにはどうしたらいいか ・伊達野菜の存在は知っているが、買いに行くことや、伊達野菜を食べる機会がないので、身近に感じられないと考える。より親しみやすくするにはどうすればいいか。 ・伊達市の新たな観光地として雑貨屋が栄えるにはどうすれば良いのか。
外国語分野	・中学校チーム　4技能を効率よく身につけるには ・小学校チーム　授業に積極的に参加し、英語に興味を持ってもらうには？ ・幼稚園チーム　小さい頃から英語に興味をもってもらうには？

家庭分野	・具体的な手話の認知度や興味を高めよう！ ・高齢者の体と心のケア ・子どもの健康のため集団感染の課題を解決する ・障害者を支える人たちの支援 ・高齢者の QOL 向上。 ・伊達レンジャー　～みんなで助け合う町づくり～
商業情報分野	・伊達野菜の良さを全道に広めたい ・伊達野菜の魅力と美味しさを伝えたい ・伊達市の観光客を増やしたい ・伊達市のおすすめの飲食店を知れ渡らせたい ・伊達市外からの観光客を増やしたい ・幼児から高齢者までの幅広い飲食店を提案する ・伊達市にどんな飲食店を設ければ、伊達市は活性化するのか。

シ　３年次「だて学」半日活動日の校外活動一覧

「だて学」の授業において、半日活動日（３時間目から６時間目まで）を２回設定し、校外活動やオンライン会議、各種プロジェクトの実行のための便宜を図った。その際の校外活動は、分野ごと、班ごとに多数回にわたるので、一覧で示す。

(ｱ) 第１回６月４日

分野	内容
国語分野	飲食店取材（牧家、和さび、キリパ） 観光施設取材（だて歴史文化ミュージアム） 伊達市役所取材
社会分野	伊達市役所取材 伊達市図書館取材 道の駅、Ａコープにてアンケート活動
理工分野	船岡町、竹原町にてランナーにインタビュー 伊達市総合体育館でインタビュー
生命医療分野	四十三山植生調査 総合公園 だて歴史の杜、あやめ川公園、館山公園調査 室蘭保健所見学・インタビュー 食育センター見学・インタビュー 市役所インタビュー 献血に関するアンケート（イオン、アークス、ツルハ、あかつき前） 医療施設訪問・見学
体育分野	※校内で一斉に中間発表
芸術分野	道の駅市場調査 連携に関する打ち合わせ（久保、牧家、イルクオーレ、天花地星）
外国語分野	伊達小学校訪問 京王幼稚園訪問
家庭分野	伊達小学校訪問 伊達赤十字病院訪問 農家訪問（大滝地区） ひまわり保育所訪問 リラクゼーションサロン umi 訪問 企画告知のパンフレット配布（市内各所）
商業情報分野	食育センター訪問・インタビュー 道の駅訪問・インタビュー・風景取材 飲食店調査（チロル、ぶどうの木）

(イ)第２回７月２３日

分野	内容
国語分野	北黄金貝塚取材 ibox 訪問・取材 伊達市立図書館・だて歴史文化ミュージアム取材
社会分野	壮瞥町役場見学・インタビュー 伊達警察署訪問・インタビュー 大滝地区見学 伊達市役所インタビュー
理工分野	室蘭工業大学見学、模擬授業、中間発表
生命医療分野	西山植生調査 聖ヶ丘病院見学
体育分野	伊達市社会福祉協議会訪問・インタビュー 伊達市カルチャーセンター訪問・インタビュー
芸術分野	飲食店調査（ハンサム食堂、ぶどうの木、菓子処久保、天花地星） 伊達市役所訪問・打ち合わせ
外国語分野	京王幼稚園訪問 伊達小学校訪問
家庭分野	くるみ保育所訪問 ひまわり保育所訪問 聖ヶ丘病院訪問
商業情報分野	食育センター取材 A コープ売り場取材 図書館～道の駅の花を撮影 飲食店取材（チロル、やねカフェ、ぶどうの木、パル） オオヤミート訪問・取材

ス　３年次「だて学」全体発表会について

「だて学」は令和５年度に始まり、令和６年度が２年目である。令和５年度の反省を踏まえて実施した令和６年度の全体発表会の状況について報告する。

(ｱ) 令和５年度全体発表会とその反省について

令和５年 11 月７日（火）に初めての発表会を実施した。生徒は 10 教科に分かれて活動していたが、10 月末までに各教科から代表１班を選抜し、体育館でスライドを用いて発表６分、質疑２分で行った。

発表会には教職員と全校生徒のほか、運営指導委員およびコンソーシアムメンバーに出席いただき、実施後に会議で講評をいただいた。また、発表会の模様は YouTube で保護者向けに限定公開した。

また、その中で特に優れた３つの班について 11 月 21 日（火）放課後に、伊達市長および伊達市議会議員を招いて発表を行った。市長、市議からは多くの質疑と温かい応援のお言葉をいただいた。

反省としては、全体発表会の司会・進行を生徒にやらせた方がよいこと、発表生徒の事前指導が不十分であったこと、時間が超過したこと、市長、市議や関係の方々に代表班全ての発表を見ていただきたかったことなどが挙げられた。

(ｲ) 令和６年度全体発表会について

令和６年度の全体発表会は 11 月 12 日（火）に行った。生徒の活動分野は、再編により９分野となったため、10 月末までに各分野から選抜された全９班による発表を実施した。実施方法は昨年度同様、体育館でスライドを用いて発表６分、質疑２分で行った。

前年度より１週遅らせて設定したことにより、司会・進行を担当する生徒と発表生徒の事前指導を充分に行うことができた。

伊達市長は公務のためご臨席いただけなかったが、伊達市議の方々と運営指導委員およびコンソーシアムメンバー、関係の方々など計 13 名が来校、終わりに伊達市教育委員会教育長に講評をいただいた。

また、本校保護者、市内の教育関係者、小中学校生徒・保護者および希望する市民に対し、発表会の模様について Zoom オンライン会議を利用してリアルタイムで配信し、更に YouTube での限定公開で視聴できるよう準備した。これにより、Zoom による配信では市内中学３年生のクラス単位での視聴など、多くの方に本校の取組を周知することができた。また、YouTube は 41 名の視聴者があった。

(ｳ) 令和６年度全体発表会代表班の一覧

	分野	課題	仮説
1	商業情報	伊達市の飲食店を紹介して商業を活性化させたい。	伊達市の飲食店をパンフレットで紹介して、さまざまな人の手に渡れば伊達市の知名度が上がるのではないか。
2	理工	北海道にあるたくさんの未利用材を有効活用できないか。	室蘭にある木質バイオマス発電所の燃料を未利用材にすることで CO_2 が削減できるのではないか。
3	芸術	どうすればアロニアの評判と知名度を上げることができるか。	アロニアを使った新商品の開発とオリジナルキャラクターを使った宣伝をすればよいのでは。
4	社会	現代社会で生じるストレスを解消するにはどうしたらよいのか。	森をテーマにしたゲームでストレスを解消することができるのではないか。
5	国語	動画の反応からわかる伊達市の強みについて。	伊達市の魅力的な面を PR する動画を見てもらい、その反応を分析することで、伊達市の観光分野における強みを知ることができるのではないか。
6	体育	夏に思い切り遊べて楽しめるスポーツイベントを行って伊達市を活性化させたい。	水鉄砲フェスティバルを行うことで伊達市の活性化に繋がり、伊達市が活気のある街になるのではないか。
7	外国語	中学生に英語を好きになってもらうにはどうすればよいか。	少人数での活動を入れた授業を行えばよいのではないか。
8	家庭	伊達レンジャー ～助け合うまちづくり～	異世代交流により、お互いに支え合える関係を築くことで、みんなが安心して暮らせる町になるのではないか。
9	生命医療	生活習慣病について。	生活習慣病について知ってもらうことで、生活習慣病への危機感を持たせることができるのではないのか。

セ　データサイエンス特別講座

本事業の一環として、希望する生徒が北海道大学理学部を訪問し、データサイエンスに係る講義・実習を受けるとともに、キャンパス内を散策・見学した。これにより学問への興味関心および進路意識の高揚を図った。第１回は令和５年３月、第２回は令和６年３月に実施した。第３回を令和７年３月に実施する予定である。

令和５年度に実施した第２回の実施状況を以下に報告する。

(ｱ) 内容

・参加生徒　１年次生徒および２年次数学Ⅱ・B 選択生徒の希望者（計 22 名）

・日時　令和６年３月 23 日（土）　8:00～17:30
8:00　伊達開来高校　集合・出発
10:00　北海道大学　到着
10:20～12:00　オリエンテーション・大学キャンパス見学
12:00～13:00　昼食・休憩（各自）
13:00～15:00　講義・実習・大学紹介
15:15　北海道大学　出発
17:30　伊達開来高校　到着

・講師　北海道大学　大学院理学研究院　数学部門　行木　孝夫　教授

・講義内容「最小二乗法と線形回帰」

データを分析するとき、単一のデータ（例えば気温の推移）だけを分析するよりも複数のデータ（例えば気温と湿度の推移）を同時に分析することが多い。これら複数のデータの間に何かしらの関係があると（例えば、一方が増加すると他方も増加するなど）、データの理解を深めることができる。二種類のデータの間に１次関数に近い関係があるとき、新しく一方のデータが増えると他方のデータを予測することができる。このように、データの間にある関係を見つける手段を回帰とよび、特に１次関数による関係を線形回帰とよぶ。

本講座では、二種類のデータから、１次関数が表す直線の傾きと切片を求める方法を学ぶ。

（ｲ）生徒の声（抜粋）

（１）オリエンテーション・大学見学について
・初めて、北大のキャンパス内を回って博物館も見ておもしろかった。
・とても広くてびっくりした。博物館は様々なジャンルのものがあってとても面白かった。
・大学の中に博物館があるのがとてもびっくりした。構内がとても広くて、驚きました。
・博物館はいろんなジャンルの研究がありとてもおもしろかった。
・大学での生活を想像できて大学生活を送れるように勉強頑張りたいなと思えました。
・実際に行ってみて敷地がとても広く、中にコンビニやレストラン、博物館などの公共機関があり、とてもフリーの雰囲気に驚いた。
・講義を受けた数学科だけでなく、理学部生物学科、教育学部、医療系学部などのたくさんの学部・学科の建物があること、そのどれもがスケールが大きいことに驚いた。

（２）講義・実習について
・まだ習ってないこともあったけど、新たな気づきがあって嬉しかった。
・講義の内容はとても難しかったけど、面白かった。また、もっと数学を頑張りたいと思った。
・難しくてあまり理解ができなかったけど、グラフを書く時大学の方が手伝ってくれたり、高校の勉強がこうやって大学でも使うことがわかって、今のうちからわからないところはしっかり理解していこうと思った。
・発展の内容で難しかったですが、授業は、小中高と大学で形式が違っていて、新鮮でした。
・式などは難しくてあまりわからなかったが、何を言いたいかは理解できた。気がした。
・授業でやったばかりのところを扱っていたのでより理解を深めることができて良かったです。また、習っていないところも触れていたけれど、理解して知らないことを知る良い機会になったと思いました。
・高校での数学が個人的にはマイナスなイメージがあったが、今回の講義で数学は日々の生活にたくさん隠れているということを知って数学に対する意識がよくなれた気がする。
・数Ⅰで習ったところと少し被せた授業をしていただいたので、理解できるところがあって良かった。
・スプレッドシートで上手く散布図を作成出来なかった時、分かりやすく丁寧に教えてくださりとても助かりました。
・内容が難しかったが、大学の授業を体験することが出来たのでとてもタメになった。
・内容はとても難しくて分からないところが多かったけど、とても楽しくてたくさんのことを学べました。スプレッドシートをつかうやつでは初めてだったけど、分かりやすくてとてもためになりました。

６　３年間の研究成果と課題

本校では、本事業の取組全体による成果を、次の３視点から目標指標を設定し、事業の評価を行うこととしている。

○　遠隔講義等を受ける機会を確保した結果、伊達市及び西胆振の未来を創造する生徒を育成することができたか。
　（指標１）将来、伊達市及び西胆振に貢献したいと考える生徒の割合
○　生徒に育成を目指す資質・能力（特に７つのジェネリックスキルのうち、「思考力」「創造力」「分析力」）が身に付いたか。
　（指標２）ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＢ以上の生徒の割合
○　地域と連携・協働した取組を推進し、本事業の取組を地域に開いた結果、本校の教育活動に魅力を感じ、進学したいと考える地元中学生を増やすことができたか。
　（指標３）伊達開来高校に進学したいと考える伊達市内の中学生の割合

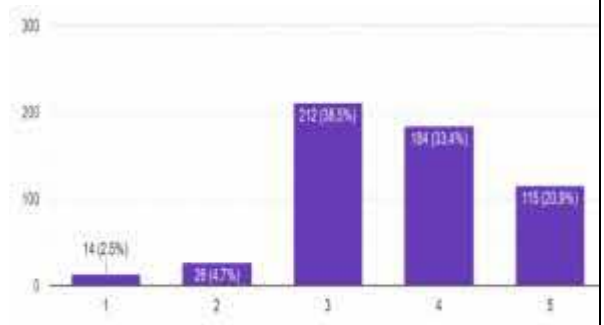
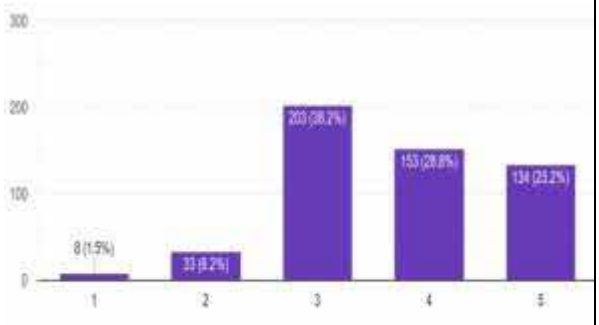
(1) 指標１について

ア　方法

全年次の生徒について「総合的な探究の時間」および「だて学」の授業を開始して間もない５月に実施したアンケート（プレ）と、11 月（ポスト）に実施したアンケートの結果を比較した。なお、ポスト調査の段階においては、１年次総合的な探究の時間では「地域理解」単元では研究活動が終了し、まとめに入る直前となっている。また、２年次総合的な探究の時間は「地域課題」単元が終了し、３年次は「だて学」が終了した時点である。

イ　全校の結果

グラフ１に全校生徒についての調査結果を示す。

質問：あなたは伊達市または西胆振に貢献したいと考えますか。	
５月（プレ）n=551	１１月（ポスト）n=531
	
Ave=3.65	Ave=3.70

グラフ１　全校生徒の調査結果

４（やや貢献したい）は減少しているものの、５（非常に貢献したい）を選択した生徒の割合が増加しており、平均値も上昇しているため、全体として伊達市または西胆振に貢献したいと考える生徒を増やすことができたといえる。

ウ　５（非常に貢献したい）を選択した生徒の割合について

表１に、「あなたは伊達市または西胆振に貢献したいと考えますか。」という質問に対する、５（非常に貢献したい）を選択した年次ごとの生徒の割合を示した。

	５月（プレ）	１１月（ポスト）	差
１年次	22.8 %	28.6 %	5.7pt 上昇
２年次	17.6 %	24.0 %	6.3pt 上昇
３年次	22.4 %	23.2 %	0.8pt 上昇

表１　５（非常に貢献したい）を選択した生徒の割合

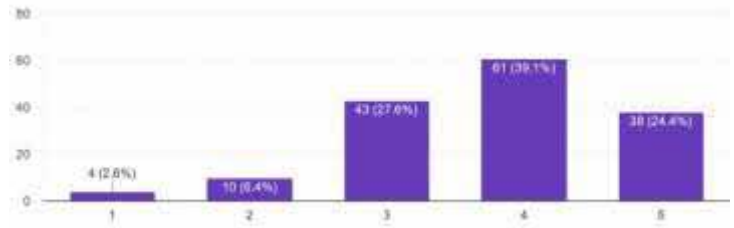
全ての年次で、非常に貢献したいと考える生徒が増加した。なお、３年次で上昇幅が小さくなった理由としては、進学や就職などで伊達市または西胆振の範囲から出ることが決まっている生徒が多く、これらの生徒が自信を持って貢献したいと言えないということが考えられる。

エ　昨年度（令和５年度）との比較

以下のグラフ２に、令和５年度の３年次生徒にとったアンケート結果を示した。令和５年度は、１年次と２年次に対してはアンケートを実施しておらず、回数も１度のみである。

また、アンケートの文言も令和６年度と異なっているため注意が必要である。

だて学を通じて、伊達市または西胆振に貢献したいと考えるようになりましたか。
（令和５年度３年次１１月　n=156）



Ave=3.77

グラフ２

この中で、５（非常に貢献したい）を選択した生徒の割合は 24.4 %であり、令和６年度３年次生徒の 23.2%に比べて高い数値となっている。

ただし、上記のとおり質問文が異なるほか、令和６年度の３年次生徒の伊達市内出身者の割合が 42.9%であるのに対し、令和５年度は 45.2%であるなど生徒のもつ背景も若干異なることから、令和５年度と令和６年度の差に有意性を見いだすことはできない。

(2) 指標２について

ア　ジェネリックスキルに関するルーブリック

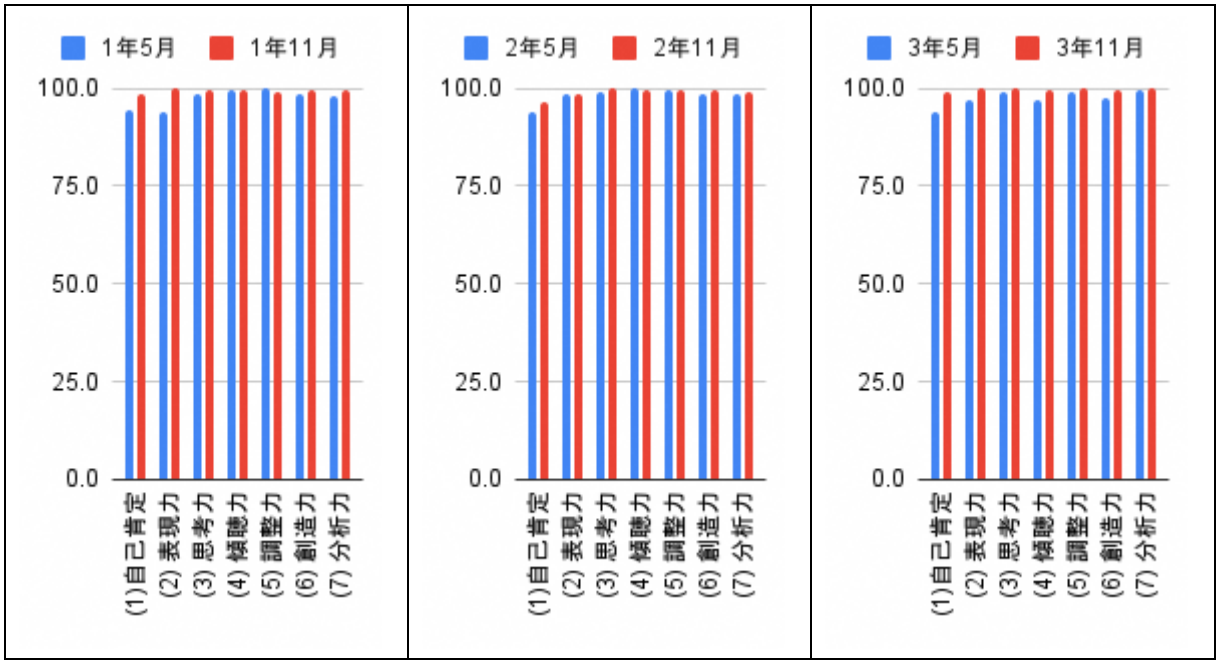
育成を目指す資質・能力		主体的に学び、意欲的に新たな学びに取り組む力		多様性を尊重し、互いのよさを認めて協働する力		地域社会に貢献し、持続可能な未来を創造する力		
		自己肯定力	表現力	思考力	傾聴力	調整力	創造力	分析力
ジェネリックスキル		自己を理解して自信を持ち、他者を尊重することができる	考えをまとめ、他者にわかりやすく伝えることができる	課題の重点を認識し、解決方法を導き出すことができる	要点を把握し、共感して他者の話を聞くことができる	異なる考えをまとめ、物事を判断し行動することができる	既成概念にとらわれず、新しい物事を考えることができる	課題を明確にし、本質がわかるように整理することができる
評価尺度	S 求めているレベルを超えて達成している	自分や他者の長所を的確に把握し、周囲と共感し協働して、責任ある言動をとることができる	伝え方を工夫して的確かつ論理的に説明することができる	課題を解決する方法を見出すことができる	話の要点を整理し、その内容を把握して、共感しながら相手の話を聞くことができる	価値観や意見の異なる人とも深い信頼関係を築き、立ち位置を考え協働することができる	経験のない状況や困難でも、既知の知識や技能を活用し、課題を解決をすることができる	仮説を実施し、得た結果を整理し、新たな課題解決に向けた方策を考えることができる
	A 求めているレベルを十分に達成している	客観的に自分や他者の長所を理解し、物事に取り組むことができる	相手に対して伝えたい主旨を適切に説明することができる	課題の重点や根拠を認識することができる	相手の話の内容から、自分の考えとの同意点や相違点を理解して話を聞くことができる	価値観や意見の違いを理解し、その中で自分の考えを適切に伝え行動することができる	既知の知識や技能を活用し、新たな課題解決の方法を提案することができる	把握された状況や整理された課題から、課題解決のための仮説を提案することができる
	B 求めているレベルを達成している	自分や他者の努力してきたことや改善を図ってきたことを確認することができる	相手に伝えたい内容を言語化して、わかりやすく伝えることができる	課題を整理することができる	相手の話の主旨を理解して聞くことができる	価値観や意見が自分とは異なる人の発言を冷静に受け止め、相手を尊重した対応ができる	既知の知識や技能を理解し、工夫や改善の方策を考えることができる	置かれた状況や環境から課題を整理することができる
	C 求めているレベルをおおむね達成している	自分が取り組んできたことが、人の役に立っていることを感じることができる	相手に伝えたい内容を伝えることができる	疑問や課題を感じることができる	相手の話を静かに聞くことができる	自分と他の人との価値観や意見の違いを理解することができる	既知の知識や技能を用いて、状況を把握することができる	置かれた状況や環境を客観的に把握することができる

イ　方法

全校生徒に対して「ジェネリックスキルに関するルーブリック」に基いた自己評価を、５月と 11 月の２回実施した。質問は自己肯定力、表現力、思考力、傾聴力、調整力、創造力、分析力の７つのジェネリックスキルについて、「〇〇力について、あなたは次の 5～1 のうちどの段階にあると思いますか。(5 が最も良い)」という質問文に続いて、選択肢としてＳ，Ａ，Ｂ，Ｃの４つの評価尺度の文言の冒頭にそれぞれ 5, 4, 3, 2 の数字を付し、最後に「1 いずれも当てはまらない」という選択肢を追加した形の 5 段階で実施した。

なお、それぞれの回答数は５月（プレ）n=551、11 月（ポスト）n=531 であった。

ウ　ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＢ以上の生徒の割合について



グラフ３　Ｂ以上の生徒の割合（年次別）

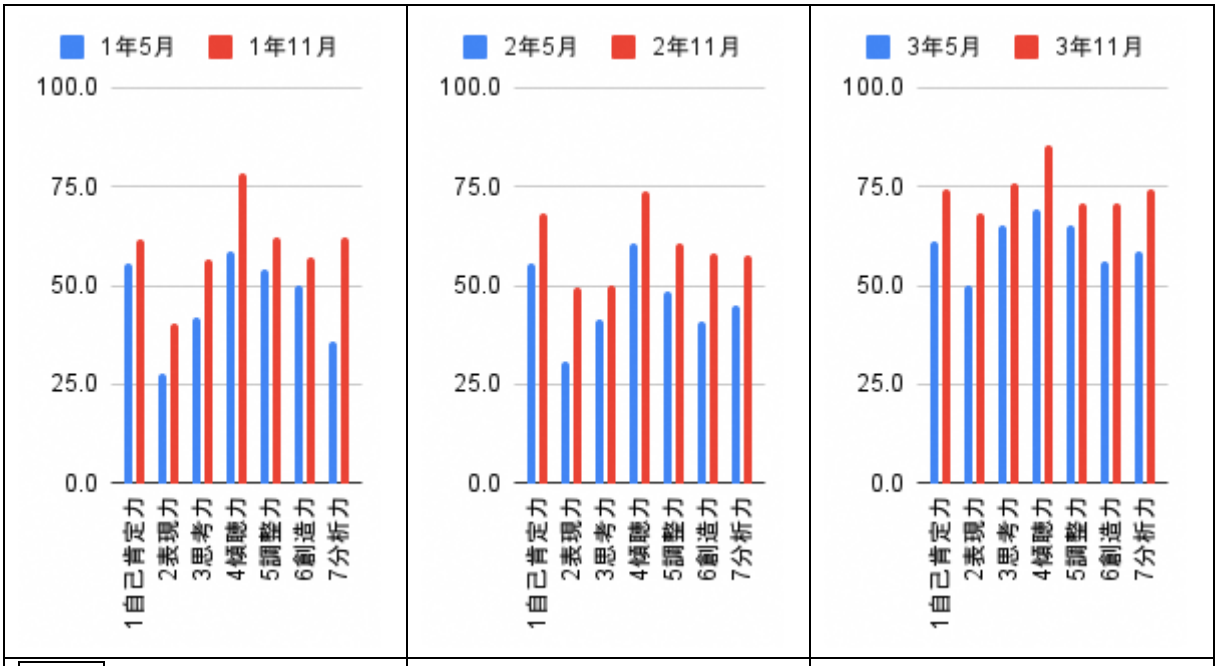
グラフ３に、計画していた目標指標である「ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＢ以上の生徒の割合」を年次別に示した。しかし、今回の調査では年度当初から評価Ｂ以上に達している生徒の割合が 100%に達しているジェネリックスキルが複数あり、指標として適さないと考えられる。

そこで、以下では、ジェネリックスキルに関するルーブリック評価で「Ａ以上の生徒の割合」と「Ｓの生徒の割合」をそれぞれ分析する。

エ　ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＡ以上の生徒の割合について

グラフ４に、「ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＡ以上の生徒の割合」及び、その上昇割合が高いジェネリックスキルの上位３項目を年次別に示した。上位項目について、この事業において、特に身に付けさせたいと考えていた「思考力」、「創造力」、「分析力」を枠で囲った。

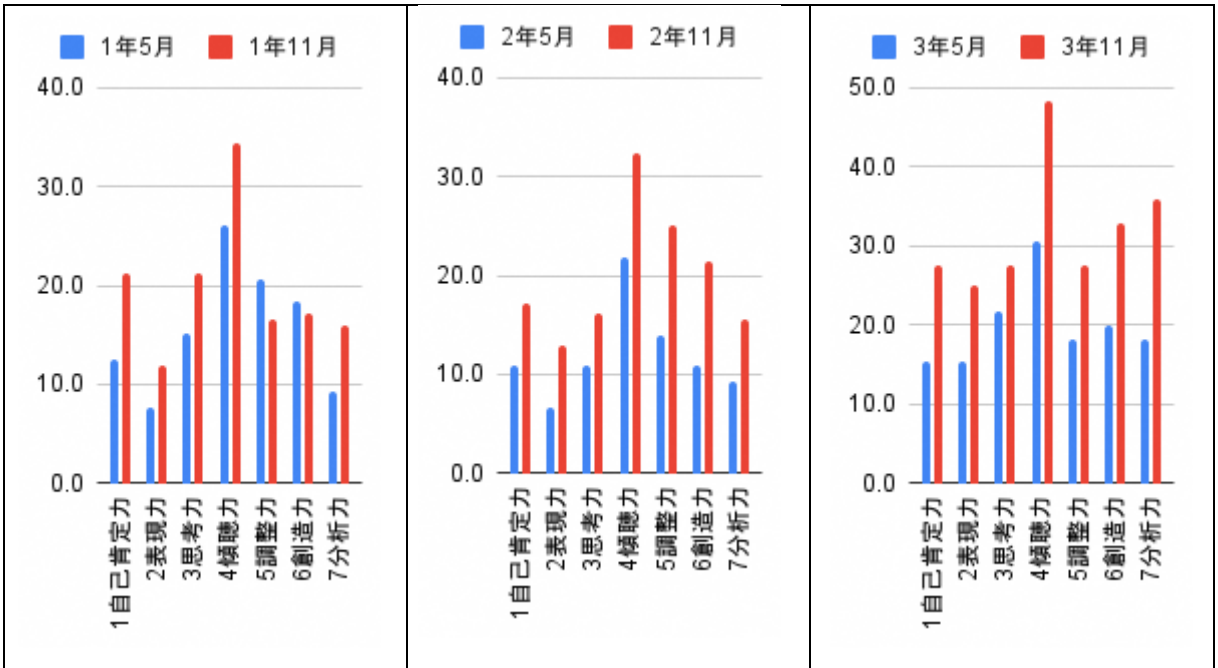
５月と 11 月とを比較したところ、全ての項目で割合の上昇が見られた。



分析力　26.4pt 上昇	表現力　18.9pt 上昇	表現力　18.3pt 上昇
傾聴力　19.6pt 上昇	創造力　17.4pt 上昇	傾聴力　16.0pt 上昇
思考力　14.7pt 上昇	傾聴力　13.3pt 上昇	分析力　15.6pt 上昇

グラフ４　Ａ以上の生徒の割合（年次別）

オ　ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＳの生徒の割合について



自己肯定力 8.6pt 上昇	調整力 11.0pt 上昇	分析力 17.7pt 上昇
傾聴力 8.2pt 上昇	傾聴力 10.5pt 上昇	傾聴力 17.6pt 上昇
分析力 6.8pt 上昇	創造力 10.5pt 上昇	創造力 12.9pt 上昇

グラフ５　　Ｓの生徒の割合（年次別）

グラフ５に、「ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でＳの生徒の割合」及び、その上昇割合が高いジェネリックスキルの上位３項目を年次別に示した。ウと同様に、上位項目について、この事業において、特に身に付けさせたいと考えていた「思考力」「創造力」「分析力」を枠で囲った。

５月と 11 月とを比較したところ、１年次の「調整力」「創造力」の項目を除き、割合の上昇が見られた。

カ　分析

この事業においては、７つのジェネリックスキルのうち特に「思考力」「創造力」「分析力」を身に付けさせることを目的として実施したが、各年次において、１年次の「創造力」で５を選択した生徒の割合を除いて、それぞれのジェネリックスキルを身に付けさせることができたといえる。

ただし、特にこの３つの力のみではなく「表現力」や「傾聴力」などその他のジェネリックスキルも身に付けさせることができたことがわかる。

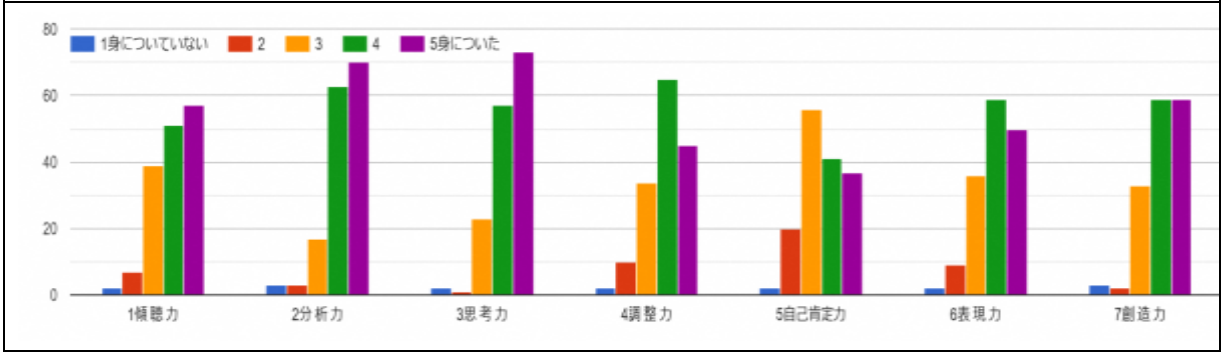
１年次の「創造力」については、単元配列の都合上、アンケート時点では工夫の余地の多い創造的な活動や独自性のある結論に至っていない者が多く、自信を持てなかったのではないかと考えられる。また、傾聴力がいずれの年次でも上位に挙がったのは、本事業で多く実施した外部講師による講演や助言の指導が生徒の印象に残ったためであると考えられる。

キ　昨年度との比較

以下のグラフ３に、令和５年度の３年次生徒にとったジェネリックスキルに関する自己評価アンケート結果を示した。令和５年度は、１年次と２年次に対してはアンケートを実施しておらず、回数も１度のみである。

また、アンケートの文言も令和６年度と異なっており「ジェネリックスキルに関するルーブリック」に準拠できていないため、数値の比較はできないことに注意が必要である。

だて学を通じて身に付いたと思うジェネリックスキルについて５段階で自己評価してください。（令和５年度３年次 11 月　n=156）



グラフ６

令和６年度が「傾聴力」「分析力」「創造力」が身に付いたと考える生徒が特に多かったのに対し、令和５年度は「思考力」「分析力」「創造力」が身に付いたと考える生徒が多かった。本事業を通じて特に育成したいスキルである「思考力」「分析力」「創造力」のうち、「分析力」と「創造力」については２つの年度を通じて、生徒に特に身に付いたと自覚させることができているといえる。

(3) 指標３について

・伊達市及び西胆振（伊達市、壮瞥町、洞爺湖町、豊浦町）からの本校への入学者数は次の表２のとおりである。

・本校は、１学年６クラスの予定で開校したが、令和３、４年度の入学者数は 200 名以下（R3,196、R4,188）であったため、結果的に５クラスとなった。令和５年度については、入学者が 208 名であったことから、この年次は６クラスである。これは、伊達市内からの入学希望者が令和４年度より 9.4 ポイント増加したことが大きな要因となっている。さらに、この現象は室蘭市内の進学校のクラス数減少の影響が主であると考えられ、令和６年度はその影響の落ち着きから、本校への入学希望者の割合について揺り戻しが起こっている。

これらの点を踏まえると、本事業による取組の周知の結果として本校への希望生徒が増加しているとは直ちに述べることはできない。しかし、本校が開校して４年が経過し、その間、本事業の取組が地元紙やＮＨＫで複数回報道された。また、高校生が「だて学」の一環として小学校や中学校、市内のさまざまな施設などへ直接赴いて活動し、多くの方々と交流を持った。これらの結果として、中学生や保護者を始めとする市民に本校の取組が周知されたことは、伊達市内や西胆振地域における本校の位置付けに、大きな役割を果たしていると考えている。

	伊達中		光陵中		大滝		伊達市		西胆振	
R3	80	173	35	79	2	7	117	259	153	353
	46.2%		44.3%		28.6%		**45.2%**		**43.3%**	
R4	77	186	38	85	3	4	118	275	164	386
	41.4%		44.7%		75.0%		**42.9%**		**42.5%**	
R5	98	179	48	93	4	7	150	279	186	367
	54.7%		51.6%		57.1%		**53.8%**		**50.7%**	
R6	83	178	37	86	0	1	120	265	174	369
	46.6%		43.0%		0.0%		**45.3%**		**47.2.%**	

本校入学数	中学卒業数
本校入学者の割合	

表２　本校へ入学する生徒の割合

(4) 本事業の、生徒のキャリア意識への影響について

本事業の中心となる総合的な探究の時間とだて学が、生徒のキャリア意識に対してどのような影響があったかをアンケートで調査した。以下の表３に、年次ごとの探究と進路活動に関するアンケートの結果をまとめた。アンケートは各質問に対して「５そう思う」から「１そう思わない」までの５段階を数字で回答する形式で、表３には各平均値をまとめた。

質問	1年次 n=175	2年次 n=192	3年次 n=164
(1)探究活動(総合的な探究の時間・だて学等)の活動内容とあなたの進路希望は関係していると思いますか。	3.0	3.2	3.3
(2)探究活動(総合的な探究の時間・だて学等)によって、キャリア形成(進路希望の成就)に必要な力が身につくと思いますか。	3.7	3.6	3.7
(3)探究活動(総合的な探究の時間・だて学等)によって、進路活動への意識は高まると思いますか。	3.4	3.5	3.4

表３　探究と進路活動に関するアンケート（５「そう思う」～１「そう思わない」の平均値）

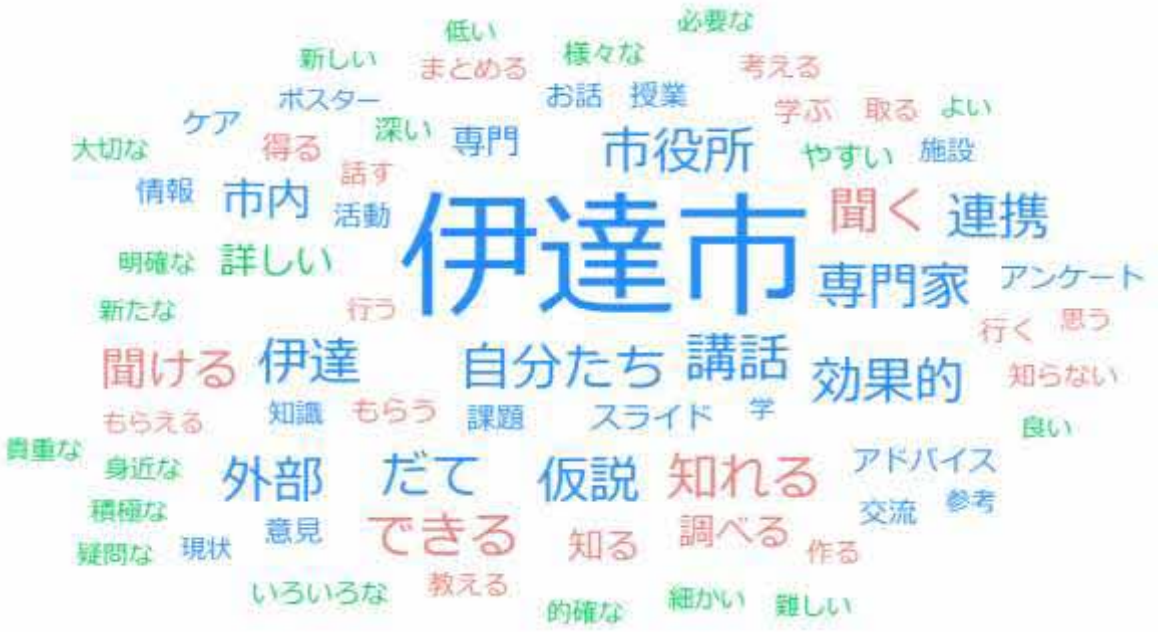
探究活動の班作成においては、生徒の興味関心に従って組み、話し合いで探究課題を設定している。その際に、なるべく進路希望の分野と関連づけるよう生徒に声をかけている。表３の質問(1)の結果からは、年次が上がり進路への意識が明確になるにつれ、探究活動と関連づけた課題を設定できる生徒が増えていると考えられる。また、質問(2)の結果からは、キャリア形成に必要な力が身に付くと考えている生徒が多いことが多いことがわかる。本校で育成したいジェネリックスキルについて、キャリア形成と関連させる形で生徒に意識付けることができていると考えている。質問(3)の結果からは、どの年次も探究活動によって進路意識がやや高まるといえる。質問(1)と比較して、進路希望と直接関係した活動ができていなくても、意識付けには働いている場合があるということがいえる。

(5) 生徒の声

総合的な探究の時間の取組を振り返ったアンケートによって生徒の考えを記述させた。以下に一部を抜粋して示すとともに、全体のテキストマイニングで得たイメージを示す。

質問(1) 探究活動(総合的な探究の時間・だて学等)において外部の専門家等と連携して行った活動の中で、特に効果的だったことを教えてください。（抜粋）
・専門の方が質問に答えてくれることがとても効果的だった。調べてもわからないことがわかって、その後のだて学がより進むようになったと思います。
・外部の人の話を聞いて、公式ホームページで分からないことや一つ一つの内容を詳しく知ることができたこと。現時点での課題などを教えてもらうことができて新しい発見が生まれたり、沢山のことを知ることができたことが効果的だった。
・市役所の人達が自分たちのレポートにアドバイスをしてくださったことです。私たちに無い考えや提案をしてくれたのが効果的でした。
・自分の班の仮説などを確かめるために実際に外部へ行きインタビューしたことで、普段はどんな感じなのかなどを聞くことができたり見せてもらえたからどのような状況かわかりやすかった。
・桜井さんが伊達市をワインの特産地にしてアジアのワイナリーにしようとしていたことを聞いて最初はとても難しいと思ったけど、緻密な計画や現段階での進行状況を聞いて本当にできるんじゃないかととてもロマンがあり現実的な話になってて、自分たちもしっかり計画して行動に起こせば難しいことでもできてしまうのではないかと改めて気付かされた。
・アヤメ川公園のことについて教えてくれた講話がとても印象的に残っていて、高齢者の人だけではなく若い世代の人々も積極的に活動に参加していることが知れて自分の考えを改めて考え直すことができた。
・ゼロカーボンの話を聞き、自分が知らないことばかりでその活動が自分たちの生活にもつながってくることだったので、もっといろんなことについて知りたいと思いました。
・校外活動を通して、道の駅の方にインタビューをし、貴重な意見や情報を入手することができた。
・血液センターの方と連携をとりながらデータをとったりしたこと。
・壮瞥の人たちが開いている大きなイベントについて参考にするため話を聞きに行ったことで、これらは僕たちが経費や場所の問題を考えるにあたってとても参考になりました。
・実際に聖ヶ丘病院へ行き、話を聞き施設を見てリハビリの現状を知れたことで具体的な説明をすることができた。
・太陽光パネルを取り扱っている望月電設さんと実際に太陽光パネルを設置した場合の費用や枚数など色々想定をしたこと。
・だて学ではイルクオーレさんと連携してピザ生地のレシピや生地を丸めるときのコツなどを教わったことにより実習で失敗せずにピザを作ることができた。
・他県の教育委員会に問い合わせたり、伊達警察署、市役所に赴いたが成果を得ることができなかったが、伊達市議会員の吉野さんにお話を伺ったことが一番効果的だった。なぜなら、ヘルメット義務化促進が進まない理由を伊達市の状況を踏まえて具体的に説明してくださったから。また、議員であるため経験や知識が豊富であり有用な情報を引き出すことができたため。
・図書館に意見を提案しに行ったときに、話せるところはしっかりとわかりやすく話してくださって詳細を教えていただいたのはありがたいなと思いました。
・室蘭工業大学に訪れた時の山中先生によるアドバイス。今後の活動に役立った。（スライドの見

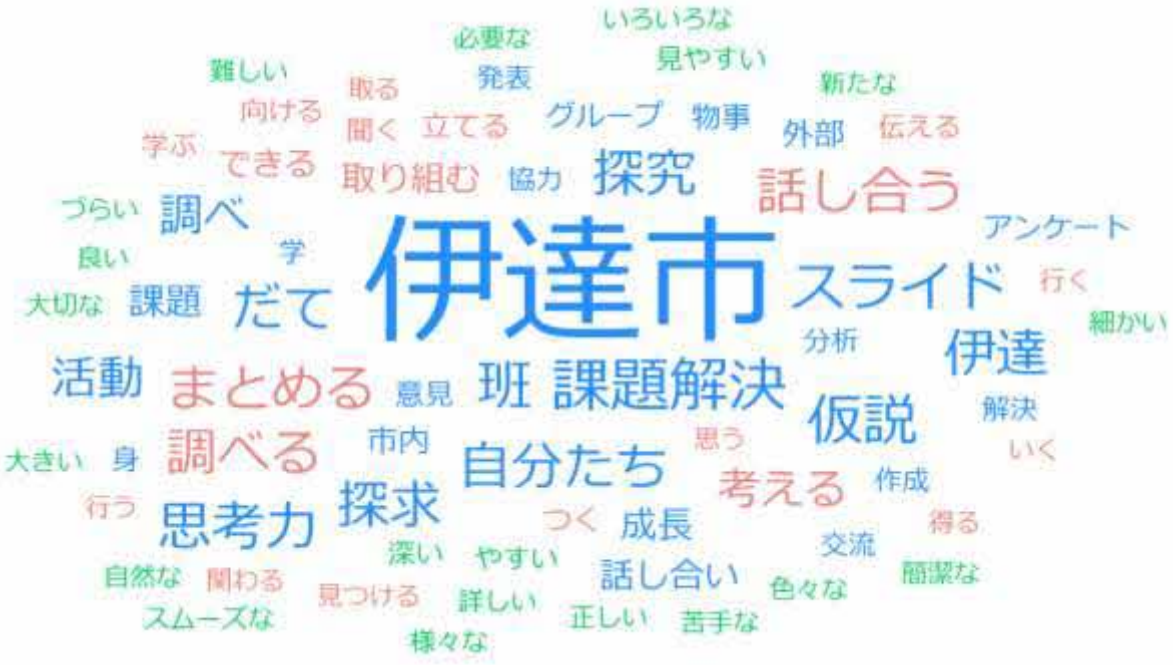
やすさなど）
・四十三山と西山の植生調査など行った際に、鹿の生息環境は低い山で、街が近い山にいることが多いはずなのに、植生があまり回復していなく、街からも遠い山の方にいるという結果になったことが疑問でしたが、班の皆と考えたときに低い山で、植生が回復していたほうの山が、いろいろな動物の種類が居たので、鹿はそこの山よりもあまり植生が回復していない山のほうが、食物を得られるから鹿がたくさんいたのだと理解することが出来ました。
・だて学で小学校に英語の授業を行った。班員は英語に関する仕事や教師になりたいと考えている人で構成されていたため、小学生の英語に対するイメージや、現状の知識力を知れる良い機会であった。また授業するという体験をでき、授業の計画のたて方や小学生にわかりやすく教える方法、教師として必要な力など将来活かしていける知識や経験を積めたと思う。
・産後ケアを実施している施設の保健師に話を聞いたり伝えたいことをまとめてポスターを作ってみんなに広められた。
・中学校での２回の授業で、アンケートの結果を踏まえて課題や仮説を変えることでより深く探究をすることができた。また、中学生との交流で話を分かりやすくする方法を考えるのが、自分にとって成長できたところだと思う。
・幼稚園で授業をしたことでこどもたちと実際に関わることができ、幼稚園教諭になりたいという気持ちが強くなった。
・実際に授業を計画して、小学校で実施することによって、教えることの難しさと達成感を感じることができたので、計画して終わりではなく実践を複数回また、多学年で行うのが効果的だと思った。
・高校生が実際に中学校に行って授業をする、という経験はなかなかできないと思うので、とても貴重な経験だったと思います。少人数制授業を行ったことで、生徒一人ひとりをより近くで見ることで今の中学１年生の英語力の現状を知れたのがいい刺激になったと思います



※User Local AI テキストマイニングを利用(https://textmining.userlocal.jp/)

質問(2)探究活動(総合的な探究の時間・だて学等)において、最も自分を成長させたと思う活動は何ですか。（抜粋）
・調べ学習の際に、自分でまとめ作業をして課題から何ができるのかや現状から自分たちが考え、行動できることがなにかを自分の中で整理し班員と意見を出し合ったこと。説明してくださった人の話をメモしたことで、聞いて自分で処理することの力がついたと思う。 ・聞いたあとにメモを取ったりなどを忘れないように行動を起こすということを進んでやることができました。 ・仮説を立てること。根拠をさがし相手にわかりやすいようにすることです。 ・病院への電話。直接電話してくれたのは班の人だけど予め聞きたいことをリストアップする必要や、話し方聞き方、メモのとりかたなど意識した。 ・仲間と話し合いながら間違ってることは教えあって全員が自分の意見を言って全員が納得できるようなパンフレットを作成したこと。 ・やることが多いということで分割して仕事をしなければならないという所が 1 番難しくて、1 番成長出来た部分だったんじゃないかなと思う。なぜなら仕事を効率良く分けるということは社会に出ても要領良く仕事をすることが出来るということなので、周りからも必要とされる人間になれるんじゃないかなと思う。 ・スマホ教室を開き，高齢者とコミュニケーションを取り，異世代交流を継続して行ったこと。コミュニケーションを取るのが苦手だったけれど関わってくれた人と交流するにつれて言葉の使い方や伝え方など様々なことを学んだ。 ・課題とその目的に適した解決策を考え仮説を立て、実際にシミュレーションを行い考察する行為が最も自分を成長させられたように感じた。 ・総合的な探究の時間、だて学で共通して最も自分を成長させたと思う活動はスライド作成です。だて学では、発表をするときに見る人に分かりやすいように文章ではなくキーワードを載せたり、具体的な数値を持ち出して伝えたい内容をはっきりさせることができていたと思う。だて学では、班員と協力しながら伊達野菜をつかったペーストを試作したりと自分にとって初めてのことがあり、良い学びになったと思う。 ・「課題を見つけ仮説を立て、実行する」という工程を何度も繰り返したため、思考力や行動力、忍耐力が身に付いたと考えるから。特に、思考力の部分で成長を感じている。なぜなら、仮説が 10 回弱水の泡となり、何度も新たな問題を見つけるために思考を巡らせていたから。これらの能力は私が大学に進学した際にも役立つと感じている。 ・だて学ではほぼ全て自分たちで外部とのやり取りがあったので、どうしたら自分たちのやりたいと思っていることを伝えられるかなどを直ぐに考える力が少しは身に付いたのではないかと思う。自分たちでできる事、出来ないことをちゃんと判断してどこまでお願いしてどこまで自分たちでやるかなどの判断力も同じく身に付き、迷惑かけないように自分たちのできることは早めにやる力が身に付いたのではないかと思う。 ・スライド作成の技術の向上はもちろんだが、イベントをやることでどのようなことを得られるか、どれくらいの人数が集まるかなどを考える力を身に付けることができ思考力を伸ばすことができた。 ・だて学で小学生に英語の授業を行ったことと、その授業計画を班員と考えたこと。 ・保健師さんに話を聞いたこと。自分たちでアポや予定を一からたてたのは初めてだったので分析力や思考力を身に付けることができた。

・市民じゃないからこそ伊達を探検したり、3 年生のだて学で伊達について特産品や有名なこと、どんな問題があるのか話を聞くことで知ることができた。
・他人との意見交換で、自分の好きなように、思う通りに事が進まなくてもそれからどう対処しておけばよいのか、先手を打っておくとか、先に準備しておくとか、リーダーなら皆を率いる役割を全うに果たしその上で指示を出すこと、状況把握能力がないと皆もついていこうとは思わないのだということを再認識させられたと思うので、意見交流の時間が自分を成長させたと思う。
・調べる時間があったおかげで課題に向けて何が必要なのかを考えリーダーとして指示を出すことができた。
・自分からアンケートのお願いなどをすること。
・自分たちの考えを支える根拠を収集すること。仮説が正しいという可能性が出てきたら、説得力のあるものを作るためにたくさんデータを集め、根拠をまとめたこと。
・グループワークです。グループワークでは各々に与えられた課題に取り組む事が必要でありどうすればより良い発表になるかを考えて活動していたからです。
・ポスターを作っていく過程で原案からどのような情報を残し、どのような情報を捨てるのかというところから自分の分析力の向上につながったし、どのようなポスターを作ったら、いろんな人に見てもらえるか、いろんな人の目に留まりやすいかなどを考えることによって思考力も身に付いた。
・集めたデータなどをまとめて見やすくするところです。なぜなら、集めたデータや自分たちが考えた仮説などを聞いている人に伝わりやすくグラフにしたり、自分たちにしかわからない説明ではなく誰が聞いてもわかるようにまとめる作業が自分を成長させたと思います。
・この活動全てです。理由としては活動を行う中で何度も壁とぶつかることがあり、たとえぶつかってしまったとしても何度も新たな構想をねったりすることで臨機応変に目の前の変化に対応する力を身に付けることによって成長することができたと思ったから。



※User Local AI テキストマイニングを利用(https://textmining.userlocal.jp/)

⑹ 専門家との連携を実施したことによる教員の変容について

今年度も各分野で積極的に外部との連携を図ることができた。特に、専門家との連携では、生徒のみならず教員にも良い影響が見られた。次に具体を述べる。

ア　国語科について

(ｱ) 吉田学園情報ビジネス専門学校（橋本校長、小椋氏）

自身の映像・プレゼン技術が向上し、それが教科教育指導力の向上につながった。

(ｲ) 札幌大学　（荒木教授）

文学を扱う際の異なる視点を得たられた。

(ｳ) 北海道帯広柏葉高等学校　（戸川教諭）

文科省科研費研究に指定された「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動」の研究に関連して、テーマで国語科教育における多文化共生に係る指導の視点を得られた。

イ　理科について

(ｱ) 北海道博物館（成田氏）

葉化石の鋸歯の割合から古気温を復元する方法について、授業で実施するやり方を学ぶことができた。

(ｲ) 公立千歳科学技術大学（坂井教授、堀野教授）

最新の科学技術を知ることができたので、他の授業でも話のネタに使えると思っている。また、化学の面白い話を聞くことで、私自身もっと化学が好きになった。堀野教授は話の構成がとても面白く、生産額と損失額を見積もりなど、今後生徒に工業的な話をするときの参考になった。

ウ　外国語科について

(ｱ) グリフィス英会話教室

地域の英語力向上のためには、学校での指導にとどまるのではなく地域資源を上手に活用することも合わせて考えていくべきだと実感できた。

エ　総合的な探究の時間／だて学について

(ｱ) バルトルディ高校（フランス）

人脈の広がりや、国際交流における日本語の活用という視点を得られた。

(ｲ) 伊達市経済環境部および市内の企業

生徒の取り組みに対して、市政や経営といった観点からフィードバックするという視点を得られた。

(ｳ) 北海道教育大学旭川校　（渥美准教授）

探究的学習における支援方法の理解が深まった。

(ｴ) 札幌国際大学　（大村准教授）

探究的学習における支援方法の理解が深まった。

(ｵ) 胆振総合振興局（倉野氏）

地域のゼロカーボン政策に関して、具体的な実情と統計的な視点について理解が深まり、他の授業においても話題にすることができるようになった。

(ｶ) 室蘭工業大学　（山中教授）

バイオマス発電の残渣処理の問題や、太陽光パネルの廃棄問題など、再生可能エネルギー利用に伴う困難さについて学んだことで、探究活動を指導する切り口が増えたり、他の授業で扱う話題が増えた。

(ｷ) 伊達信用金庫（舘崎理事長）

地域経済における金融機関の役割について学んだことで、地域を題材に探究する活動において経済的な視点からの指導ができるようになった。

(ｸ) 苫小牧バイオマス発電所

バイオマス発電の手順詳細について知ることができ、解像度が高まった。また、燃料用木材の流通に関する知見をいただいたので、今後の探究活動に活かせると考えている。

7　事業の実施体制や管理方法

(1) 管理機関による事業の実施体制や管理方法

ア　実施体制

・北海道教育委員会では、伊達開来高校が本事業を円滑に進めることができるよう、高校教育課長の下に、創造的教育方法実践プログラム推進チームを組織し、運営指導委員会やコンソーシアム会議に本校を所管する胆振教育局の指導主事を派遣するなどして、指導・助言を行った。

イ　管理方法

・創造的教育方法実践プログラム推進チームを運営指導委員会やコンソーシアム会議に派遣し進捗状況を把握するとともに、胆振教育局高等学校教育指導班が日常的に本校からの連絡・相談に対応し、その状況を推進チームに逐次報告した。運営指導委員会やコンソーシアム会議を開催し、進捗状況を管理するとともに事業実施上の課題を整理し、本校に指導・助言することで本事業を推進した。なお、運営指導委員に対しては謝金を支出している。

(2) 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

ア　実施体制

・本校では、職員間の連携と業務の平準化を推進するため、令和４年度から校務分掌を３部８課に再編し、各部・課には、部長・課長を置き、分掌間の連絡調整は部長が担う体制とした。しかし、細分化により一つの課の人数が少なくなった影響で、分掌内の業務振り分けに不都合が生じたことから、令和６年度より課を廃止し４部体制に再々編した。

・令和５年度は、本事業は「総務部特色ある教育推進課」が中心となって進めたが、令和６年度は「教務部」が担当した。

・令和６年度の「だて学」の運営については、令和５年度に定期的に実施した「だて学担当者会議」を発展させ、教務部の総合的な探究の時間担当者も含めて「探究推進委員会」として実施した。

イ　管理方法

・「探究推進委員会」において、進捗状況や運営上の問題点を確認しながら、ルーブリックを用いて評価の観点を揃えることにより内容の充実を図った。

・令和５年度に３回実施したコンソーシアム会議の議論を受け、令和６年度は５月に改めてコンソーシアム会議を開催し、年度当初に各構成員の専門性から本校の取組を支援してもらう機会として、カリキュラム開発を推進した。

・令和５年度に２回実施した運営指導委員会での指導助言を踏まえ、カリキュラムの改善および開発を推進した。

８　運営指導委員会の体制及び取組

(1) 体制

所属	氏名	主な実績
伊達市教育委員会教育長	影山　吉則	元伊達高校校長､伊達緑丘高校教頭、伊達市内の小中高の連携をリード。
北海道大学　観光学高等研究センター　教授	山村　高淑	センター長、道教委主催の様々な事業にセンターとして協力。
学校法人吉田学園　学園長	大山　節夫	元北海道立教育研究所副所長、登別明日中等教育学校初代校長、明日中等の「地域との協働」や「グローバル教育」などの礎を築く。
九州大学教育学部　准教授	伊藤　崇達	遠隔授業に関する研究開発学校運営指導委員（H29～R3）
東京学芸大学　特命教授	長尾　篤志	元文部科学省主任視学官、ＳＳＨをはじめ、様々な事業を指導した経験があり、ＳＴＥＡＭ教育にも造詣が深い。
北海道教育大学教職大学院	赤間　幸人	元北海道教育庁教育監、「総合的な学習の時間」を中心に協同学習を推進する。共著に「アクティブ・ラーナーを育てる高校」がある。

※委員について、令和４年度からの継続で依頼をした。

(2) 取組

・第１回会議　令和６年 11 月 12 日（火）13:30～16:30

(ｱ) 「だて学」発表会見学

(ｲ) 質疑応答

Q　テーマはどのように決定したのか。

A　分野毎に大テーマを決定しているところもあるが、基本的には生徒個人の興味関心に沿って班毎のテーマは決定している。

Q　今日発表に至らなかった生徒はどうだったのだろうか。

A　生徒の進路選択（総合選抜に用いるなど）状況によって力の入り具合は多様であったように感じる。

Q　外部連携における時間の調整はどう行ったか。

A　半日活動を活用することが基本だったが、放課後や土日の活動もあったため大変ではあった。

(ｳ) 指導助言

・社会とのつながりを意識した学習活動は重要である。今回は文部科学省の指定事業であるが、伊達市が中心となって小中高を結ぶ活動があってもよいのではないだろうか。以前、同様の事業やテーマを実践した学校との交流を行うことも面白いだろう。

・自らの課題意識に応じた探究テーマの決定は、時間がかかって指導が大変かもしれないが重要なことである。また、学校から飛び出すことに加えて、その他者との関わりをも

とに拡張的学習を行ってほしい。生徒への達成感にもなるのではないか。

・だて学の取組が高校でとどまらず、大学以降で発揮されていることもよい成果であろう。生徒の取組以外にも、伊達開来高校の教員が市内義務教育における探究的学習の質の向上に寄与していることもあり、よい影響を与えていることがわかる。

・地域課題を扱うことはやりやすいと聞く。資料データの事前配付や、ゆっくり話す指導をするなど、より伝わる工夫をするとよりよい。１年次からテーマを継続した班が複数あったが、どのように３年間の学習を設計するかは重要である。最後はきちんとした形に残したいと思うが、１，２年次のうちは途中の状態を整理させるという半ばの状態で終わっても構わないと考える。また、大学以降社会で活躍できる人物を育てるという観点からいうと、高校で完結できなかったとしても進路先で探究を繋げられることも重要ではないだろうか。また、探究的学習の姿勢を各教科で醸成していただきたい。これら土台がないと総合的な探究の時間に深まりが生まれない。

・第２回会議　令和７年２月５日(水)　13:30～16:00

(ｱ) 今年度の取組についての報告

・本事業の目標の確認と、それに対応した実践について
・今年度の特徴的な取組について
・本事業の研究成果の分析について
・教員全体の変容について
・今後に向けて

(ｲ)質疑応答

Q 具体的な生徒の変容について、集約されているものがあれば知りたい。
A 生徒の声を含むアンケート結果を報告書にまとめている。
Q 改めて、だて学の位置付けを理解するためのポンチ絵が欲しい。
A （資料共有）３年次２単位で実施する単独科目で、全員履修としている。伊達市における地域課題について、９つの分野を用意して探究している。
Q 生徒からの、探究やだて学に対する批判的な意見はないのだろうか。
A 生徒に学習の量的・質的な負荷をかけて実施しているため「面倒くさい」「受験勉強に時間をかけたい」というような声はある。しかし、卒業後を見据えた場合に、探究的学習に取組んでおくことが重要であると意義を説明している。

(ｳ) 指導助言

・探究学習に力を入れていることと、その生徒の反応や教員の指導のしかたについて、市内の一部からネガティブな反応も聞こえてくる。しかし、教科学習との関連付けを意識して組み立ててゆくことで、教科の学びの価値を実感できる地域探究学習であってほしい。また、今後も伊達市教育委員会では様々な大学等と連携した取組があるが、道立高校と市立小中学校の境を問わず、地域探究学習および教科指導の連携を深めていただきたい。伊達開来高校の取組は先進的であるので、示唆をいただきたい。
・伊達市にいるとできない、ということはない。地方の価値が見直される時代でもあることを踏まえると、今後も本事業のような取組が必要になると考えられる。より充実することを願っている。
・生徒や教員にとって、豊かな経験になったように感じている。学習モデルとしても、

１年次から探究的な学習を意識させるという形は有用性がありそうだ。さらに教科の役割を意識して、モデルを再形成していくことができると今後につながるのではないだろうか。
また、well-being の重要性についても考えていただきたい。国の方針としても、この言葉の重要性が指摘されるようになってきた。これは単なる幸せではなく、様々な観点から複合的に幸せであることを表す概念であるため、伊達開来高校における「自己肯定力」に着目することは発展が見込めるかもしれない。地域とのつながりや社会貢献からも well-being の実感が得られるため、今回の事業をその観点で振り返るのも価値があるかもしれない。

・教員の負担について、大きく感じている教員は少なくないと思われる。その課題をどのように乗り越えていくか。これについては、まず教員の意見を受け止めることが大切だろう。
だて学の位置付けについて、総合的な探究の時間との相違が大きくないため、１年次の課題設定と重複する部分もあるだろうから、だて学では広げる、という観点も重要ではないか。そういう意味で、中間発表の機会を設けて、取組の振り返りの場面を置くことは重要である。また、教科との連携がない探究は弱い。講義や講演が多いと、生徒は飽きてしまうのではないかと懸念している。

・中教審の案として、探究活動を高度化することと自立化することが求められている。ジェネリックスキルの定着について、その詳細を分析していくことが重要である。生徒が思考力や分析力をどのような形で捉えているかを伝えていただきたい。
テキストマイニングによる生徒の声の分析では「話し合う」という語が目立ったので、協働的な学びの重要性を理解していたと見受けられるが、全国的にはそこに苦手意識を持つ生徒もいることが予想される。成功に導けた要因について分析したり、明らかにすることが大切である。また、自己肯定感について、高校では実感する機会が少ないため、探究の時間はそれを感じられる重要な時間になるのではないだろうか。自分が困ったときに相談したり話し合うことは、個性の伸長や協働の定着につながるため、大切にしてほしい。資質能力の育成を教科横断的に取り組んでいるのはよい取組であり、探究をベースにした学校運営協議会の活用というのは高校の CS 活用例として、効果的な発想であるように思える。

９　コンソーシアムの体制及び取組

(1) 体制

所属	氏名	主な実績
伊達市企画財政部長	岡村　崇央	高校が市や企業と連携した取組を支援
伊達市教育委員会教育部 学校教育課長	今藤　康之	高校が中学校と連携する際の窓口
山口県立大学　国際文化学部 国際文化学科　准教授	阿部　真育	北海道・札幌市・北海道大学・ニトリの協定における北大の担当者
北海道大学 アイヌ共生推進本部 准教授	岡田　真弓	北海道教育委員会主催の「社会との共創推進プロジェクト」における講師
北海道教育大学函館校　教授 キャンパス長補佐 地域協働推進センター長	齋藤　征人	高校生の探究活動と学内の教員を結び付けるなど、高校が地域と協働する取組を支援
学校法人吉田学園 専門学校 北海道福祉・保育大学校長	吉田　克彦	連携協定締結時の責任者
ベネッセコーポレーション 北海道支社課長	渡辺　健太	本校生徒の成績を多角的に分析、他県の取組等の情報を提供

※委員は令和４年度からの継続で依頼。

(2) 取組

・第１回会議　令和６年５月 14 日(火)　15:45～16:15

(ｱ) 今年度の取組についての説明

・だて学は 10 教科から９分野へ再編した。理科と数学を「理工分野」「生命医療分野」とし、情報と商業を統合した。

・１年次は地域について理解を深めることを目的として、巡検を増やした。

・２年次においても地域理解が充実するよう班ごとの校外活動を計画している。

・探究課題を深めるため、地域に関する単元は１，２年次の総合的な探究の時間でも扱っているが、今年度のだて学では、１，２年次から継続的に取り組んでいるテーマに引き続き取り組む班が見られる。狙い通りであり、良い傾向である。

(ｲ) 質疑応答

Q 指定事業は今年度で終わるが、来年度以降に向けてはどのように考えているか。

A 指定事業が終わっても自走して探究活動ができるように、大学等の連携協定を活用するとともに、地域とはコミュニティスクールを活用していきたい。具体については校内でもまだ話は進んでいないので、少しずつ検討していきたい。

・第２回会議　令和６年 11 月 12 日（火）13:30～16:30（運営指導委員会と合同開催）

(ｱ) 発表見学

(ｲ) 質疑応答

Q 代表選考はどのように行ったのか。

A ９つの分野毎に、２つから７つの班があるので、それぞれで選考する。活動に関わっていただいた学校外方々の評価を踏まえながら決定したところもあれば、教科の教員が集まって選考した分野もあり、様々である。

(ｳ) 助言および感想

・完成度が非常に高かった印象である。また単年度の取組ではなく継承を感じた。発表が慣れている様子であった。質疑に関する対応も堂々としていて良い。探究的なサイクルが成立していた。

・義務教育との差であるが、生徒がテーマを決める際の工夫が重要だと考えている。探究テーマの分野ごとの継承も大事だが、生徒それぞれの興味関心に従う余地を残すことも大切かと思う。テーマ等の整理の際、各種大学が入試で提示している探究シートは参考になる。助言内容の記入欄もあったため、ぜひご覧いただきたい。また、まとめについては未来を見据えて行うとよい。

・第３回会議　令和７年２月５日(水)　13:30～16:00（運営指導委員会と合同開催）

(ｱ) 今年度の取組についての報告

・本事業の目標の確認と、それに対応した実践について
・今年度の特徴的な取組について
・本事業の研究成果の分析について
・教員全体の変容について
・今後に向けて

(ｲ) 質疑応答

Q 入学者の推移について、入学者の選択理由の主な内容は何か。

A オープンスクール等の資料によると、社会性の指導を求めている。

Q 受検生や入学生の地理的な制限はあるのか。道内の他校から地域探究を学習する生徒を募集するような方法もあるのではないか。

A 遠方からの受検は、基本的には一家転住を必要としている。伊達市には適する寮や下宿もないため、なかなか難しい。

Q 中学生の早期入学の制度等は作れないのか。

A 制度として難しいが、本校と地域のつながりの PR は必要である。

(ｳ) 助言及び感想

・だて学の実践内容などを市へフィードバックしていただきたい。生徒の発表は見たが、普段の活動の様子が見えにくいので何か伝達する方法が欲しい。

・報告書の内容について、テキストマイニングは使用したツールによって分析結果が変わるので明記してほしい。

・探究活動について、高校生による先の見えない未来への対応を考えさせるということが主題であったが、高校生による解決は無理だろう。これはむしろ教員に向けた課題であって、教育の枠組みをこの主題に対して解答を示せるように設計する必要がある。つまり、私たち教育者が勉強をしなければならないということである。協力する地域側にはまだ充分な理解が及んでいない地域が多い。教育分野における取組を一般企業等にも広報していくことが課題である。

一方で、探究活動で育てた資質能力は、伸ばしたい内容と合致していたのか。意図しない力が伸びることはあるが、目的と結果の合致から効果を検証したほうがよい。対応力もしくは「地頭」とされるものを育てられるのは高校なのではないか。これを指標化できたらよい。

・自己肯定力と傾聴力が一番大事だと思っている。探究に重要なのはそれらではないか。今後目指すべき方向性として、西胆振の貢献というものをどこまで本気で求めるのかが課題である。子どもたちにその使命を負わせることは重荷すぎないか。もう少し抽象的な目標でも良いのではないだろうか。直接的還元を指標にしなくてもよい。長い目で見ることも許されるのではないか。PBL に寄せてゆくのも一つの考え方である。また、学校運営協議会の活用として、私は探究の実働部隊でなくてもよいと考える。
・この取組が、生徒にとって進路選択や職業選択をするうえでの基礎体力になっていることが予想され、よいと考える。また、だて学等で訪問する中学生や小学生により高い価値を感じてもらえるような取り組みにするためには、各校の生徒同士や教員同士の関係性を強めていくことが大切である。
・全道的に探究的学習の質が上がっている。この指定事業を受けなければ達成できなかったこと、という内容を報告していただきたい。苦労や失敗を含めた報告があると、全道的な知見になるとも思われる。また、学校運営協議会の活用について、通常授業を見せるなどして意見を収集するという活用方法もあるだろう。
・生徒の感想からだて学の成果を抽出する際には、テキストマイニングによるキーワードの抽出だけでなく、生成 AI の活用などもするとよい。
・学習モデルの具体化が達成されつつあるように思える。これまでの取組を伊達開来独自の内容として他校にも示せると思うが、今後の発展を考えることも必要である。総合的な探究の時間とどのように関連付けるかを整理する必要がある。また、グループや教員によって取組や指導の差は大きい。よい指導をしている先生は問いかけ続けていてすぐに答えを与えていない。これは今後のヒントになる。文理という壁を取っ払い、高校段階で多様性を養わせることが重要である。
・今後の取組を充実させながら他校へ発信していただければよい。ここからが始まりなので、校内体制を整備して継承していってほしい。

10　コーディネーターの配置及び活動内容

(1) コーディネーター

・伊藤　秀範（72 歳）
・北海道大学大学院工学研究科博士課程修了（工学博士）
・国立大学法人室蘭工業大学名誉教授
・国立大学法人北海道国立大学機構監事
・業務内容として、関係機関との連絡調整のほか、本校教諭と連携して実践的な探究活動のアドバイスを行う。また、胆振地区における進路相談員としての経験から、地域探究活動における新たな活動場所を開拓する。

(2) 今年度活動内容

・「だて学」における生徒へのアドバイス及び教員への指導助言
・高等教育機関との連携、連絡調整

11　令和６年度　成果普及のための取組

ア「だて学」全体発表会（令和６年 11 月 12 日(火)）

・Zoom および YouTube を活用することで、市内の学校関係者や本校の取り組みに興味のある市民、探究活動の関係者に成果を公開することができた。特に、伊達市立光陵中学校の生徒が発表を視聴したことは、今後の探究活動推進に繋がると考えている。

イ　令和６年度「探究チャレンジ胆振・日高」（令和６年 12 月 18 日(水)）

・北海道教育委員会の主催するオンラインの探究活動成果発表会であり、２年次１チームが「伊達市民の心と体の健康を両立させるために」というテーマで参加した。

ウ　令和６年度「社会との共創」推進プロジェクト（令和７年１月７日(火)）

・北海道教育委員会の主催するオンラインの探究活動成果発表会である。３年次１チームが「伊達レンジャー　～みんなで助け合うまちづくり～」というテーマで「地域課題解決型」部門に参加し、上位大会である「探究チャレンジ・アジア」の出場校に選出された。

・このチームは１年次から同テーマを深めてきており、「社会との共創」推進プロジェクトで上位大会に進出するのは３年連続である。

エ　探究チャレンジ・アジア（令和７年２月１日(土)）

・北海道教育委員会の主催する発表会である。北海道大学を会場にし、ポスターセッション形式で実施される。上記ウに記載した３年次１チームが「伊達レンジャー　～みんなで助け合うまちづくり～」というテーマで参加した。

オ　小中高「だて学」担当者連携会議（令和６年７月４日(木)）

・本校の主催で、市内の小中学校および伊達高等養護学校の担当者が集まり「だて学」における連携強化のために会議を行った。本校は校長（藤村学）と教務部担当者（花光隆太朗）が出席し、本事業による成果や取組状況について説明した。

カ　伊達市教育実践交流研修会（令和６年７月 29 日(月)、30 日(火)）

・伊達市教育委員会主催の小学校、中学校の教諭が各日 40 名程度参加する研修会に、本校は教頭（粟島はるか）と教務部担当者（花光隆太朗）が出席し、本事業による成果や取組状況について説明した。

12　本事業のまとめ

成果として挙げたとおり、本事業を通じて伊達市および西胆振に貢献したいと考える生徒を増やすことで地域に貢献するとともに、生徒の学力およびジェネリックスキルを向上させることができた。

一方で、本校にとっての成果としては、以下の３つを挙げることができる。

(1) 外部連携を多く取り入れたカリキュラム

(2) (1)を実施するための教員のスキル、人脈、経験等

(3) 教員の探究活動指導力と指導意識

「外部連携を多く取り入れたカリキュラム」については、多数開発することができたが、次年度以降も継続的に実施し、生徒の資質・能力の向上を図る必要がある。そのために活用したいのが、令和５年度より立ち上げた学校運営協議会（コミュニティスクール）である。協議会を構成する委員は、自治会役員、PTA 役員、市役所職員、市議会議員、市民活動支援担当、市内会社役員、本校職員となっている。この組織の活用や「小中高『だて学』担当者連携会議」を通じた市内小中学校との連携を活かし、更なる発展を目指したい。

本事業を通して、外部連携を実施するための、教員のスキル、人脈、経験が蓄積された。これは非常に大きな財産であるため、本業務を属人化させて人事異動とともに失うことがないよう、「だて学」の各分野については、旧担当者と新担当者の二人で担当する等の工夫や、総合的な探究の時間の指導内容に分掌（教務部）が責任をもつことなどにより、次年度以降に引き継ぎたい。

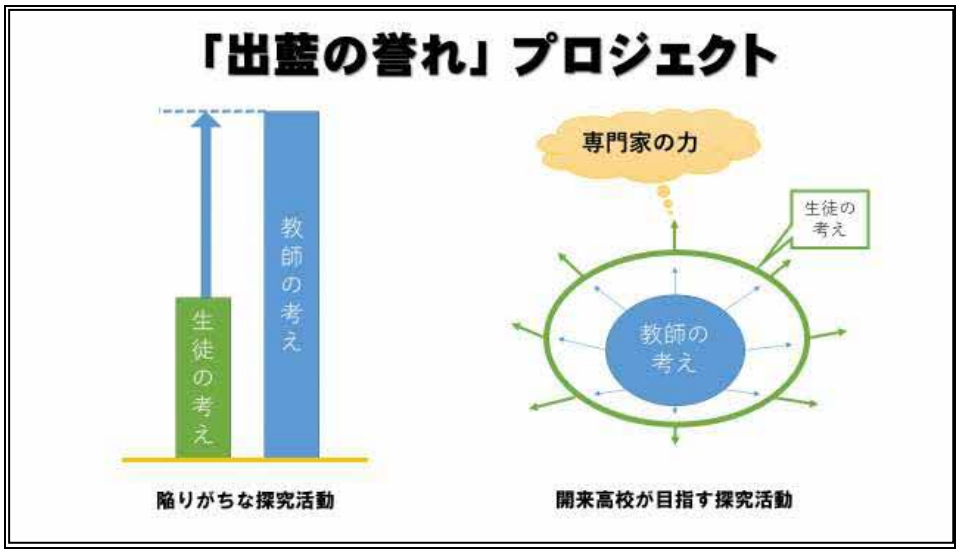
更に、本事業に協力していただいた運営指導委員およびコンソーシアムのメンバーの皆様との繋がりも、本校としての財産である。今後もご指導ご鞭撻をいただくことで、教員の探究活動指導力と指導意識の向上を図り、教育の充実化を推進したい。

また、「だて学」をはじめとする探究活動は、本事業の柱として位置付けられ、注力して取り組んできた。本校開校前の母体校においては、旧来の「総合的な学習の時間」を踏襲した指導方法にとどまっていたが、本校では、本事業の取組を通じて、教員全体で探究活動の重要性を強く認識することができ、短期間で先進的な改革を実施することができたといえる。

北海道では、この３年間、北海道教育委員会主催の「探究チャレンジ」等の事業を通じて探究の指導方法の浸透が進んだ。そのような中、本校は新設校としてスタートしたばかりであったが、先進的な取組を行　うことができた。今後も、探究に力を入れている他校と比べても引けを取らないよう、意欲的に取り組んでいきたい。

指定事業初年度である令和４年度の事業報告書には、次のように記載している。

> 今年度の探究活動は、「アウトサイド・イン（未来ソウゾウ“想像・創造”型探究活動）」を目指して、高等教育機関や企業等の協力を得ながら、地域貢献につながる提案等ができるよう取り組んできた。昨年度に比べると生徒の発想も豊かになり、多岐にわたる課題解決策が提案されていた。提案の完成度も高く、関係機関からも高評価をいただいている。
>
> しかしながら、他者を驚嘆させる内容とはなっておらず、改善の余地がある。そこで、次年度は、本校の探究活動を「『出藍の誉れ』プロジェクト」と名付け、生徒の考えや発想等が教師の考えや発想等を超えていくことを目指す予定である。下図は「出藍の誉れ」プロジェクトのイメージ図である。教師が生徒の考え等の隙間を埋める作業をサポートするとともに、専門家の力を借りながら生徒の考え等を膨らませる。
>
> なお、「『出藍の誉れ』プロジェクト」のネーミングについては、伊達市が北海道唯一の藍の生産地であり、伝統的に藍染めも行われていることから、地域の特産を踏まえたものである。



生徒たちは、「６　３年間の研究成果と課題」で示したように、約２年半の活動を通して大きく成長した。その成長をサポートできるよう、教職員集団もさらに資質・能力の向上を図り、今後も伊達開来高校の発展を目指したい。

伊達産アロニア おいしくPR

開来高の3年生「だて学」発表会

【伊達】伊達開来高の3年生が地域課題の解決を目指す「だて学」の本年度発表会が12日、同高で開かれた。生徒たちは、地域おこしや商品開発など九つの取り組みを披露した。

同高では、3年生が毎週2時間、「だて学」の授業がある。「理工」「家庭」など9分野で、生徒が地域課題を設定し、解決策を考える。

市特産の「アロニア」の知名度向上に取り組んだグループは、道の駅だて歴史の杜の飲食店と協力して、新商品を開発。アロニアにイチゴを混ぜてジャムをつくり、ソフトクリームにかけたパフェを10月中旬に販売し、「アロニアは渋くて苦手というイメージを変え、完売するほどの人気だった」と報告した。

商業活性化のため、飲食店に取材してパンフレットを制作したり、異世代交流のため生徒が高齢者を対象にスマホ操作の教室を開いた事例も披露された。

市教委の影山吉則教育長は「課題解決のため、仮説を立てて検証することは卒業後に役立つ」と講評した。（足利直哉）

地域課題の解決に向けた活動の成果を発表する伊達開来高生

北海道新聞　令和６年 11 月 13 日掲載（北海道新聞提供）

著作物利用許諾番号　北海道新聞社許諾 D2411-2511-00029002

「だて学」集大成 堂々と

開来高3年生 全体発表

【伊達】高校生が地域課題の解決策などを自主的に考える「だて学」を学んだ、伊達開来高校（藤村学校長、545人）の3年生による「全体発表会」が12日、伊達市竹原町の同校体育館で開かれた。これまでの集大成をスライドを使い堂々と発表、保護者や教員らの関心を集めた。（西川将也）

壇上で学びの集大成を発表する伊達開来高の3年生

室蘭民報　令和６年 11 月 15 日掲載

若い視点でカフェマップ

伊達開来高の３人作製

【伊達】伊達開来高校の生徒が市内のカフェ店をまとめた「カフェマップ」を作製した。若者の視点で端的に店の特徴などを紹介している。「多くの人たちに活用してほしい」と伊達市に寄贈した。（奥村憲史）

「ぜひ活用を」市に寄贈

だて学の授業の一環で商業情報（ビジネス）班の中田一華さん（３年）、齋藤陽和さん（同）、畑谷望歩さん（同）が作った。３人は春から構想を練り、夏に５店舗を取材した。

同マップはＡ４判カラー三つ折り。店舗名はもちろん、自分たちで撮影した料理や店内の写真、コメントを掲載。多いところで４、５回通った店もあるという。ＱＲコードを掲載し、スマートフォンなどで読み込むと地図を検索できる。

３人が11月29日に市役所を訪れ、堀井敬太市長に100部を手渡した。市は本庁舎、市観光物産館などに置く予定。堀井市長は「若い視点でまちづくりに参加していただき、伊達の良いところを紹介してくれてありがたい」と笑顔を見せた。

またカフェにアンケートの協力を依頼し客層などを調査。観光客の来店が少ないことを裏付けたという。今後、作製した同マップを観光客らの市内周遊時に役立ててもらう考え。

齋藤さんは「飲食、カフェ系で知っているところを含め、多くの人に行ってほしいところを選びました」、中田さんは「伊達市民にもぜひ見てほしい」、畑谷さんは「このチラシを見てお店に行ってみたいと思ってほしい」とそれぞれ述べた。

カフェマップを手に笑顔を見せる堀井市長と伊達開来高校生

室蘭民報　令和６年 12 月３日掲載

伊達の飲食店紹介 役立てて

堀井敬太市長（右端）に市内のカフェを紹介するパンフレットを手渡した伊達開来高の生徒

開来高生3人、市にパンフ寄贈

【伊達】伊達開来高の3年生3人が、地域課題の解決策を探る授業「だて学」で、市内の飲食店を紹介するパンフレットを制作した。11月29日に市役所を訪れ、パンフレット100枚を市に寄贈した。

寄贈したのは、中田一華さん、斎藤陽和さん、畑谷望歩さん＝いずれも18歳＝。市内を訪れる観光客を増やそうと制作した。

パンフレットはA4判で三つ折り。「ぶどうの木」（鹿島町7）など市内のカフェ5カ所を紹介し、実際に店を訪問して料理を食べた感想も記している。レイアウトも生徒が考え、印刷も行った。

同日市役所を訪れた3人は、「パンフレットを市の施設に置いてもらえれば」と堀井敬太市長に手渡した。堀井市長は「若い目線でまちづくりに参加してくれてありがたい」と感謝していた。パンフレットは本庁舎と第2庁舎、道の駅だて歴史の杜の市観光物産館に置く予定。

だて学の授業は毎年3年生が取り組んでおり、本年度は先月12日に同校で「商業情報」「社会」など9分野で成果発表を行った。（足利直哉）

北海道新聞　令和6年 12 月4日掲載（北海道新聞提供）
著作物利用許諾番号　北海道新聞社許諾 D2412-2512-00029059

文部科学省指定事業
新時代に対応した高等学校改革推進事業
（創造的教育方法実践プログラム）

研究開発実践報告書

発行年月　令和 7 年 3 月
発　　行　北海道伊達開来高等学校
〒052-0011　北海道伊達市竹原町 44 番地
TEL：0142-23-2525
FAX：0142-23-2526
E-mail：date-kaiki-jimu@hokkaido-c.ed.jp

印 刷 所　村上印刷株式会社